

概 況

平成三十一年・令和元年(二〇一九)の歌舞伎界 小玉祥子

大幹部の名作への取り組みと新作上演が印象に残る年であった。玉三郎が文化功労者と芸術院会員に選出され、秀太郎と竹本莪太夫、杵屋勝国、藤倉名生が重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。また、梅玉が部屋子の梅丸を養子とし、名を蒼玉と改めさせた。一月には海老蔵の十三世團十郎白猿襲名披露と長男堀越勸玄の八代目新之助初舞台が二〇二〇年に催されることが発表された。

歌舞伎座の一月は大幹部が多く出演する「寿初春大歌舞伎」。昼は幸四郎の和事らしい柔らかなみのある伊左衛門と七之助のあでやかな夕霧による「廓文章」、白鵬の久々となる大藏卿による「一條大藏譚」など。夜は「絵本太功記 尼ヶ崎閑居」で吉右衛門の光秀、幸四郎の十次郎、雀右衛門の操と顔がそろう、「松竹梅湯島掛額」では猿之助の長兵衛、七之助のお七、幸四郎の吉三郎と中堅世代が活躍。二月は「二月大歌舞伎」。初世辰之助の三十三回忌追善狂言が三作。昼の追善狂言は二作品。一本目が序幕の「義経千本桜 すし屋」で松緑が権太に初挑戦。無駄死になるとなる最期に悔しさがにじんだ。もうひとつの追善が「闇闇の丑松」。菊五郎の丑松が純粋な男の落ち

いった闇を見せた。時蔵のお米、左團次の四郎兵衛。夜は序幕の「熊谷陣屋」で吉右衛門の熊谷が「物語」を見事に語った。最後が追善狂言の「名月八幡祭」。松緑の新助が心情の変化を出し、玉三郎の美代吉が意図せずに相手を翻弄するところどころの無さを活写、仁左衛門の三次が甘えることに長けた男性を魅力的に見せた。

三月は「三月大歌舞伎」。昼の序幕が「女鳴神」。孝太郎の鳴神尼。中幕が幸四郎の洒脱な「傀儡師」。最後が「傾城反魂香」。「土佐将監閑居」の前に「近江国高嶋館」と「館外竹藪」を付けた。白鵬の又平は動きとセリフの間が良く、不器用でまっすぐな気性を感じさせた。猿之助のおとく。夜の序幕は「盛綱陣屋」。仁左衛門の盛綱が首実検での心の動きを鮮やかに示した。秀太郎の微妙、雀右衛門の篝火、孝太郎の早瀬、歌六の時政と揃った。最後が「弁天娘女男白浪」。弁天小僧は幸四郎。猿之助のダブルキャスト。幸四郎は武家娘に化けている間も男の線をちらりと出し、猿之助は娘そのものとして見せた。白鵬の駄右衛門が大きく、南郷は猿弥と幸四郎のダブルキャスト。

四月は「四月大歌舞伎」。昼の中幕が「新版歌祭文」。「野崎村」の前に発端の「座摩社」を置き、いわゆる「みどり」式の上演にひと工夫を加えた。こうした形態は、歌舞伎を見慣れない観客への理解の助けともなる。時蔵のお光、雀右衛門のお染。同年代の二人の女方が役にふさわしい対比を見せた。最後が「鈴ヶ森」。菊五郎の権八は鶺鴒色の着付けが似合っ

て色気があり、吉右衛門の長兵衛は舞台ぶりが大きく台詞が見事。この年屈指の好舞台となった。夜の序幕が「実盛物語」。仁左衛門の実盛がさつそうとして華やか。中幕が「黒塚」。猿之助の老女岩手実は安達原の鬼女は救済を信じてのうきうきとした喜びを見せ、鬼女の本性を出してからは所作に躍動感があつた。最後が「二人夕霧」。「吉田屋」のパロディーで、鴈治郎の伊左衛門、魁春の先の夕霧、孝太郎の後の夕霧がのどかな柔らかなみを出した。

五月が「團菊祭五月大歌舞伎」。昼の序幕が若い顔合わせの「寿曾我対面」。梅枝の十郎、萬太郎の五郎、尾上右近の大磯の虎、米吉の化粧坂少将、松緑の工藤。中幕が「勸進帳」。海老蔵の弁慶、松緑の富樫、菊之助の義経。

かつて三之助と呼ばれた三人の顔合わせ。最後が「め組の喧嘩」。菊五郎の辰五郎が江戸前の粋さで、時蔵のお仲が気風のいい世話女房ぶり。

夜の「絵本牛若丸」は菊之助の長男、七代目丑之助の初舞台披露狂言。祖父の菊五郎、吉右衛門を始めとして主だった俳優が顔をそろえた。次が菊之助の「京鹿子娘道成寺」。緩急の付いた見事な舞台ぶり。最後が「御所五郎蔵」。松也の五郎蔵、彦三郎の土右衛門、梅枝の皐月、尾上右近の逢州。

六月が「六月大歌舞伎」。昼が名作古典中心、夜が新作の通しという対照的な演出立て。昼の序幕が「寿式三番叟」。幸四郎と松也の三番叟が息の合った動きを見せた。「石切梶原」では吉右衛門の梶原が喜怒哀楽をはつきりと見せ、陽性の人物像を浮き彫りにした。歌六の六郎太夫は娘への情がにじみ、米吉の梢に色気があった。最後が「封印切」。仁左衛門の忠兵衛は愛嬌と優しみがあがり、追い詰められての苦悩を印象付けた。孝太郎に薄幸の女性らしい悲しみが感じられた

夜が三谷幸喜作・演出の「三谷かぶき 月光露針路日本 風雲児たち」の通し。みなもと太郎の漫画を原作に、船の漂流で仲間とロシア領に着いた船頭、大黒屋光太夫の帰国までの十年の苦難を描く。幸四郎の光太夫が生真面目さを出し、猿之助、愛之助らが個性的な水主を演じた。白鷺がポチョムキンを演じ

た。

七月は海老蔵、獅童、右團次らの出演による「七月大歌舞伎」。昼はみどり形式で、序幕が「高時」。右團次の高時、兄太郎の衣笠。続いて西郷と豚姫。獅童のお玉が西郷（錦之助）への一途さを愛らしく見せた。次が「素襖落」。海老蔵の太郎冠者、獅童の大名、兄太郎の姫御寮。最後が「外郎売」。海老蔵の長男、堀越勸玄が「ういろう」の言い立てを見事に聞かせた。海老蔵の外郎売、梅玉の工藤、魁春の大磯の虎。

夜が「星合世十三團 成田千本桜」。「義経千本桜」の平知盛、いがみの権太、忠信など主要十三役を海老蔵が早変わりで見せるのが趣向。発端の「福原平家御殿跡」から大詰の「川連法眼館」までを筋を理解できるように通した。梅玉の義経、魁春の典侍の局、雀右衛門の静御前、左團次の梶原。

八月は「八月納涼歌舞伎」。三部制で、一部が「伽羅先代萩 御殿 床下」。七之助の政岡は終始気の張った様子がうかがえる好演。幸四郎は八汐を憎々しく、仁木を不気味に見せた。もう一本が「闇梅百物語」。

二部が「東海道中膝栗毛」。幸四郎の弥次郎兵衛、猿之助の喜多八によるシリーズ四作目。「鈴ヶ森」「女殺油地獄」「一本刀士俵入」などの名作の趣向を盛り込んだ。

三部が「新版 雪之丞変化」（日下部太郎脚本・演出補、坂東玉三郎演出・補綴）。玉三

郎の雪之丞、七之助の秋空星三郎、中車が闇太郎など五役。装置はほとんどなく、映像と俳優が会話するなど斬新な構成で展開も早い舞台となった。

九月が「秀山祭九月大歌舞伎」。三世歌六百回忌追善狂言が昼夜にあった。昼の序幕が「幡随長兵衛」。幸四郎の長兵衛の舞台ぶりが大きく、雀右衛門のお時、息子、長松との別れの悲しみを見せた。次が梅玉の鳶頭、魁春と梅枝の芸者の「お祭り」。最後が追善狂言の「沼津」。吉右衛門の十兵衛が前半で細やかな感情の動きを見せ、後半では平作とお米への思いをのぞかせた。歌六の平作は前半で生真面目さと愛嬌のある姿を見せ、後半の悲しみを印象付けた。雀右衛門のお米が父と夫への愛情を感じさせ、又五郎の安兵衛が主人への忠義心を表現。

夜の序幕が「寺子屋」。吉右衛門の松王丸の感情表現が見事で、菊之助の千代が気丈さと子を失った悲しみを出した。幸四郎の源蔵が忠義さを示し、兄太郎がいい世話女房ぶり。又五郎の玄蕃が憎々しさを示した。福助の園生の前、丑之助の秀才。中幕が「勧進帳」。弁慶は仁左衛門と幸四郎のダブルキャスト。仁左衛門が義経への思いと智の両面を出した。富樫は幸四郎と錦之助のダブルキャスト。義経は孝太郎。最後が追善狂言の「松浦の太鼓」。歌六が初役の松浦鎮信で稚氣と正義感ある人柄を生き生きと見せた。又五郎の高大

源吾がさつそうとし、米吉のお縫が初々しい。

十月は「芸術祭十月大歌舞伎」。昼は「廓三番叟」に続いて「御振勧進帳 安宅の助」。松緑の弁慶に強さと稚気があり、愛之助の端正な富樫との対比が出た。次が「蜘蛛絲梓弦」。愛之助が小姓、太鼓持、座頭、傾城と姿を変え、最後に蜘蛛の精の本性を現す。最後が「お祭佐七」。菊五郎の佐七が粹で魅力的。時蔵の小糸が佐七に惚れぬいた様子を見せた。

夜の序幕が「三人吉三」。「大川端」から「本郷火の見櫓」まで。松緑の和尚吉三、愛之助のお坊吉三、松也と梅枝のダブルキャストのお嬢吉三。松緑が大きさ、愛之助は出自を忍ばせる優しみを出した。松也のお嬢は立ち役の線を感じさせる強さを出し、梅枝は世話と時代の台詞を使い分けた。歌六の伝吉。

最後が「二人静」。能に題材を得た新作舞踊。玉三郎の静御前の霊、兄太郎の若菜。

十一月は「吉例顔見世大歌舞伎」。昼の序幕が「研辰の討たれ」。幸四郎が辰次の滑稽味と哀れさを表現。彼を追う兄弟を彦三郎、坂東亀蔵が勤めた。中幕が芝翫の「関三奴」。最後が「髪結新二」。菊五郎が小悪党の新三を魅力たっぷりに演じた。時蔵の忠七、團蔵の弥太五郎源七、左團次の長兵衛と周囲もそろった。

夜の序幕が「菊畑」。梅丸改め蒼玉披露狂言。蒼玉の虎蔵ががりしく、梅玉の智恵内が虎蔵への忠義と鬼一への情に揺れる姿を見せた。芝翫は腹のよめないすぐみを出した。魁

春の皆鶴姫。中幕が「連獅子」。幸四郎の狂言師右近後に親獅子の精、染五郎の狂言師左近後に仔獅子の精。前シテは二人の息が合い、後シテではともに毛布を勇壮に見せた。最後が「市松小僧の女」。時蔵のお千代が前後半で演技に変化をつけた。

十二月は「十二月大歌舞伎」。昼は最後の「壇浦兜軍記」の阿古屋を玉三郎が勤めるAプロと、梅枝と兄太郎が交互に演じるBプロに分かれた。彦三郎の重忠が捌き役らしい清潔感と台詞の冴えを見せた。岩永はAプロが松緑、Bプロが九團次。序幕はA、Bとも「たぬき」(大佛次郎作)。中車、金兵衛が内面の動きを鮮やかに見せた。中幕はAが梅枝の松風、兄太郎の村雨の舞踊「村松風二人汐汲」、Bが玉三郎の「保名」。

夜の序幕が「神霊矢口渡」。梅枝のお舟が初々しく激しく情熱を見せた。松緑の頓兵衛が愛嬌と悪辣さの両面を表現。最後が新作の「本朝白雪姫譚話」(竹柴潤一脚本、玉三郎補綴・衣裳考証、花柳壽應・壽輔演出・振付)。「グリム童話」の翻案。玉三郎の白雪姫、兄太郎の野分の前、梅枝の鏡の精、歌之助の輝陽の皇子。野分の前と鏡の精の掛け合いが面白かった。

国立劇場は一月が「姫路城音菊礎石」の通し。菊五郎監修による姫路城城主、桃井家のお家騒動物。菊五郎が敵役印南内膳で不敵さを見せた。松緑の与九郎狐、菊之助の小女郎

狐の活躍する「大蔵谷平作住居」に面白みがあった。

三月は「三月歌舞伎公演」で桜をテーマにした新歌舞伎と古典の二本立て。最初が「元禄忠臣蔵 御浜御殿綱豊卿」。扇雀が綱豊で英明さゆえの苦悩を表現し、歌昇が助右衛門で一途さを見せた。続いて舞踊「積恋雪関扉」。

菊之助の関兵衛実は大伴黒主、梅枝の小町姫・墨染実は大町桜の精、萬太郎の宗貞。菊之助が天明舞踊らしい大らかさを出し、梅枝は小町姫ではしとりとした色気を、墨染では、恋人への思いと精霊らしいはかなさを見せた。萬太郎には気品があった。

六月は「六月歌舞伎鑑賞教室」。「神霊矢口渡 頓兵衛住家」。吉太郎のお舟、鴈治郎の頓兵衛、虎之介の義峯。

七月は「七月歌舞伎鑑賞教室」。最初が「車引」で、松緑の松王丸、坂東亀蔵の梅王丸、新悟の桜丸、松江の時平。次が「棒しばり」で、松緑の次郎冠者、坂東亀蔵の太郎冠者、松江の松兵衛。

十月は「天竺徳兵衛韓断」の通し。芝翫の初役の徳兵衛が柄に合い、古怪さ、おおらかさを発揮。弥十郎の吉岡宗観と細川政元、又五郎の梅津掃部、東蔵の夕浪。

十一月は「孤高勇士娘景清」の通し。「大仏殿万代石楚」・娘景清八嶋日記をもとに、源氏に敗れて後の平家の猛将、悪七兵衛景清の顛末を描いた。吉右衛門の景清が、生き別れ

た娘糸滝(雀右衛門)への思いを表現した。

十二月は古典と新歌舞伎の二本立て。最初が「盛綱陣屋」。白鸚が盛綱の心情の変化を緻密に見せた。吉弥の微妙が揺れる思いを見事に表現。高麗蔵の早瀬、魁春の篝火、彌十郎の和田と揃った。続いてがチャップリンの映画「街の灯」を原作にした木村錦花作「蝙蝠の安さん」。幸四郎が安さんの純粋さを愛嬌たっぷりに見せた。新悟のお花、猿弥の新兵衛。

新橋演舞場は一月が「初春歌舞伎」。昼の序幕が「義経千本桜 鳥居前」。獅童の狐忠信。次が「幡随長兵衛」。海老蔵の長兵衛が息子長松(堀越勸玄)との別れを切なく見せた。最後が新作舞踊「三升曲輪傘売」。海老蔵の実は石川五右衛門の傘売り。夜の序幕が「鳴神」。右團次の鳴神に強さがあり、児太郎の絶間姫が必死さを感じさせた。続いて舞踊「牡丹花十一代」。次が「俊寛」。海老蔵の俊寛。最後が海老蔵の「鏡獅子」。

十、十一月がスーパー歌舞伎Ⅱ「新版オグリ」。梅原猛原作、横内謙介脚本、猿之助・杉原邦生演出、猿翁スーパーバイザー。オグリと遊行上人は猿之助と単人のダブルキャスト、新悟の照手。映像モニターを用い、四季の風景が映され、オグリを支える小栗党の存在感が増し、群像劇的な色合いが濃くなるなど旧版とは大きく変わった。

十二月は宮崎駿の人氣漫画の初の劇化と

なつた話題作「風の谷のナウシカ」の昼夜通しでの上演。菊之助がナウシカの純粹さを見せ、七之助がクシャナを魅力的に造形した。

南座は三月が「坂東玉三郎特別公演」。最初が「壇浦兜軍記」で玉三郎の阿古屋、彦三郎の重忠、坂東亀蔵の岩永。次が「太刀盗人」。彦三郎のすっぱ、亀蔵の万兵衛、吉之丞の目代。最後が「傾城雪吉原」。玉三郎の傾城。

六月が「NARUTOーナルト」。巳之助のうずまきナルトと波風ミナト、単人のうちはサスケ、梅玉のうちはマダラ。

八月が「八月南座超歌舞伎」。獅童、初音ミクで「お国山三 當世流歌舞伎踊」「今昔饗宴千本桜」。

九月が「東海道四谷怪談」の通し。愛之助の伊右衛門、七之助のお岩、与茂七、小仏小平、中車の直助権兵衛。

十一月末から十二月が「吉例顔見世興行」。昼の序幕が「輝虎配膳」。愛之助の輝虎、秀太郎の越路、雀右衛門のお勝、単人の直江山城守、壹太郎の唐衣。次が「辰駕」。梅玉の浪花の次郎作実は石川五右衛門、時蔵の吾妻の与四郎実は真柴久吉、梅丸改め苔玉の禿たより。続いて「金閨寺」。壹太郎初役の雪姫、鴈治郎の大膳、扇雀の久吉、愛之助の正清。最後が「忠臣蔵 祇園一力茶屋」。仁左衛門の由良之助、芝翫の平右衛門、孝太郎のお軽。夜は「堀川波の鼓」。仁左衛門の彦九郎、時蔵のお種、梅玉の源右衛門。「釣女」。愛之助

の太郎冠者、単人の大名、鴈治郎の醜女、苔玉の上臈。「魚屋宗五郎」。芝翫の宗五郎、雀右衛門のおはま、鴈治郎の主計之助、孝太郎のおなぎなど。

大阪松竹座は一月が「初春大歌舞伎」。昼の序幕が「土屋主税」。扇雀の土屋主税、愛之助の大高源吾、壹太郎のお園、彌十郎の其角。中幕が坂田藤十郎米寿記念の舞踊「寿栄藤末廣」。最後が「河庄」。鴈治郎の治兵衛、壹太郎の小春、愛之助の太兵衛、亀鶴の善六、彌十郎の孫右衛門。夜が「金門五三桐」の通し。愛之助の石川五右衛門、此村大炊之介実は宋蘇卿、鴈治郎の真柴久吉。

御園座は四月が「陽春花形歌舞伎」で「南総里見八犬伝」。芝翫の犬山道節、網干左母二郎、松緑の犬飼現八、愛之助の犬塚信乃、赤岩一角。

九月が「坂東玉三郎特別舞踊公演」。「秋の色種」「傾城雪吉原」。

十月が「吉例顔見世」。昼が「狐と笛吹き」。梅玉の春方、雀右衛門のともね。「双蝶々曲輪日記 角力場、難波裏、引窓」。仁左衛門の南与兵衛、獅童の長五郎、鴈治郎の与五郎、長吉、孝太郎のお早、壹太郎の吾妻。夜が「基太平記白石噺」。雀右衛門の宮城野、孝太郎の信夫、梅玉の大黒屋惣六。「身替座禅」。仁左衛門の右京、鴈治郎の玉の井。「臉の母」。獅童の忠太郎、秀太郎のおはま。

博多座は三月が「三月花形歌舞伎」。昼夜と

も「鯉つかみ」。愛之助が滝窓志賀之助など六役。

六月が「六月博多座大歌舞伎」。昼の序幕が「金閣寺」。松緑の大膳、梅枝の雪姫、芝翫の久吉、時蔵の直信。中幕が扇雀の「保名」。最後が「野晒悟助」。菊五郎の悟助、菊之助の憂世戸平、松緑の提婆仁三郎。夜の序幕が「姫山姥」。時蔵の八重桐、芝翫の煙草屋源七実、坂田蔵人、菊之助の白菊。中幕が「土蜘蛛」。菊之助の僧智壽実、土蜘蛛の精、梅枝の頼光。最後が「権三と助十」。芝翫の権三、松緑の助十、扇雀のおかん、彦三郎の勘太郎。

一月は浅草公会堂で松也、歌昇、巳之助らの「新春浅草歌舞伎」。昼が「戻駕」「義賢最期」「芋掘長者」。夜が「対面」「番町皿屋敷」「乗合船」。

「松竹大歌舞伎」巡業は三月末から四月が「中央コース」。二代目白鸚、十代目幸四郎襲名披露で「口上」菅原伝授手習鑑 賀茂堤車引「奴道成寺」。梅玉が参加。

同六月末から七月末が東コースで二代目白

鸚、十代目幸四郎襲名披露。「口上」「引窓」「かさね」。猿之助が参加。

同八月末から九月末が「西コース」。鴈治郎、扇雀、高麗蔵、松也らで「封印切」「蜘蛛絲梓弦」。

二月は徳島県鳴門市・大塚国際美術館で「システイーナ歌舞伎」。愛之助、忝太郎、吉弥、猿弥らで「新説諸国譚 T A M E T O M O」の上演。

海老蔵主演の「六本木歌舞伎 羅生門」は二月の東京・EXシアター六本木を皮切りに大阪・オリックス劇場、札幌市民ホールなどで上演された。

四月は香川県・金丸座で「四国こんぴら歌舞伎大芝居」。勘九郎、七之助、扇雀、中車らの出演で一部が「すし屋」「心中月夜星野屋」、二部が「傾城反魂香 将監閑居」「高坏」「芝浜革財布」。

五月は「女殺油地獄」が東京・天王洲アイエル・寺田倉庫と歌舞伎町・新宿FACEという劇場ではない空間で上演された。獅童の与

兵衛、忝太郎のお吉、芸者小菊。

十月は熊本・八千代座で「坂東玉三郎映像×舞踊公演」。「鷺娘」「楊貴妃」。

十一月は北九州市の小倉城勝山公園で「平成中村座小倉城公演」が催された。獅童、勘九郎、七之助らの出演で昼は「神霊矢口渡」「お祭り」「封印切」。夜は「小笠原騒動」の通し。

同月の兵庫県豊岡市の出石永楽館では「永楽館歌舞伎」。愛之助、忝太郎、吉弥らの出演で「道成寺再鐘供養 仙石権兵衛出世噺」「滑稽俄安宅新開」。

自主公演も盛んで八、九月には鳶之助の「第二回鳶之会」、尾上右近の「第五回 研之會」、九團次と廣松の「九團次・廣松の会」、十一月には海老蔵の「ABKAI」が催された。

2019年の商業演劇

水落 潔

四月末に平成天皇が退位し、五月に新天皇が即位し元号が令和と改まった。戦争の体験を持っている私のような世代は、皇室に複雑

な思いを持っているが、より若い世代の人たちはそうでもないようだ。令和を祝う声で国中が盛り上がり少々呆気にとられた。安倍政

権は憲政史上最長を記録したが、生活が良くなったという実感はなく、政権の私物化による不祥事が続発した。世界各地で紛争が起こ

り、米中の貿易戦争は深刻になり日韓関係は最悪になった。地球温暖化によるものか、世界的に異常気象が続き、日本も三つの大台風に襲われ東日本を中心に大きな被害が出た。大企業で不正事件が次々に顕れ、京都アニメーション放火事件、高齢ドライバーによる事故、子供虐待など多くの悲惨な事件が起こった。しかし、一応の平和は続き株価は上がるなど好材料もあって、商業演劇の世界はまず順調に推移した。

新橋演舞場の一月は海老蔵一座の歌舞伎。

二月は「喜劇名作公演」で新派130年、松竹新喜劇70年、合わせて200年と銘打って、それぞれの人気狂言を上演した。新派狂言は北條秀司作「太夫さん」を改題した大場正昭演出「華の太夫道中」で、波乃久里子のおえい、曾我廼家文童の善助で、客演した藤原紀香が頭の弱いきみ子を演じた。新喜劇の狂言は館直志作「船場の子守唄」を改題した成瀬芳一補綴、米田巨演出「おばあちゃんの子守唄」で水谷八重子が隠居の節子を演じ、渋谷天外、井上恵美子が息子夫婦、春本由香の孫娘。どちらも芸達者な座員が脇を固め両作品共に好舞台に仕上がった、とくに「子守唄」で駄菓子屋の亭主を演じた曾我廼家寛太郎がとぼけた味わいを出し大阪喜劇の面白さを見せた。三月後半はせきどみきのお脚本、川浪ナミオ演出「トリッパ遊園地」で閉鎖寸前の遊園地の社長がタイムスリップして戦時中の遊園地に行

き、必死で遊園地を守ろうとしている当時の社員の心意気に打たれるという物語。ジャニーズ事務所所の河合郁人、辰巳雄大の主演で榎本孝明、純名里紗らが共演した。三月末の三日間はOSK日本歌劇団のレビュー「春のおどり」で、桐生麻耶がトップスターの披露をした。四月から五月は恒例になった「滝沢歌舞伎ZERO」で、今年から滝沢秀明は演出に回り06年に結成したSnow Manの9人が主演した。東京に先駆けて二月に南座で上演した。大掛かりな装置や本水を使った立ち回りを見せジャニーズファンで盛況だった。六月は恒例になった「熱海五郎一座」。連続6回目の公演で吉高寿男作、三宅裕司構成、演出の「翔べないスペースマンと危険なシナリオ」。30日後に巨大隕石が日本に衝突するという情報で、様々な分野の専門家が集められるが個性派揃いのため共同作業はスムーズに運ばない。三宅裕司、渡辺正行、小倉久寛、春風亭昇太らのレギュラーに高島礼子、橋本マナミが加わった。固定ファンが付いているように興行的には好成績を上げたそうだ。

七月は矢野誠一原作、小幡欣治脚本「桜月記から佐々木渚脚本、浅香哲哉演出の「笑う門には福来たる」。吉本興業の創始者吉本せいの一代記で、4年4ヶ月振りに演舞場に出演した藤山直美が主演し、喜多村緑郎、林与一、田村亮、石倉三郎らが共演した。良くも悪くも直美版の喜劇になっていた。

八月は前半が山村美紗原作、齋藤雅文脚本、演出の「京都都大路謎の花くらべ」で、平成27年に京都南座で初演した作品。祇園のクラブのホステス桃子が死んだ事件が発端で、その追悼の催しの最中に第二の殺人が起こる。波乃久里子、喜多村緑郎、河合雪之丞ら新派勢に中村梅雀、山村紅葉、長谷川純らが共演した。まずまずの出来映えだった。後半は藤井清美作、演出の「ブラック・オ・ホワイト」で、地方営業所のパワハラを告発するメールが本社に届き、その真相を確かめるためエリート社員がアルバイトに化けて地方営業所に雇われる。佐藤アツヒロ、内博貴、羽場裕一、真琴つばさが出演したが凡作に終わった。九月はブロードウェイのミュージカル・コメディ「ペテン師と詐欺師」。十月と十一月はスーパー歌舞伎Ⅱの「オグリ」。十二月は新作歌舞伎「風の谷のナウシカ」を上演した。

新派は三越劇場を拠点に二公演を行った。正月は花形公演と銘打って泉鏡花に「日本橋」を齋藤雅文演出で上演した。河合雪之丞のお孝、高橋恵子の清葉、喜多村緑郎の葛木、田口守の五十嵐という配役だったが、齋藤演出に工夫があり優れた舞台になった。六月には篠井英介を客演に迎え、川口松太郎作、成瀬芳一脚色、演出「夜の蝶」を上演した。

昭和30年代の銀座を舞台にした新しい花柳界もので、銀座で人気を二分した実在したク

ラブのママをモデルにした作品。河合雪之丞と篠井英介が主演し、喜多村緑郎、瀬戸摩純、山村紅葉らが共演した。

東京の松竹公演としては、他に三公演がある。日生劇場で五月に齋藤雅文作、宮田慶子演出で「クイーン・エリザベス」を上演した。

16世紀半ばのイギリスの女王エリザベス一世の一代記で、生涯独身を通しイギリス王国の基礎を築いた女王の歩みと苦悩を描いた歴史劇。大地真央が主演し、西岡徳馬、長野博、高木雄也らが共演した。九月にはジャニー喜多川作、演出のミュージカル「少年たち」、十一月にはサンシャイン劇場でジャニーズ事務所の「虎者」によるミュージカルも上演した。

東宝は今年もミュージカルが主流であった。

帝劇は年間を通してミュージカルを上演した。題名だけを紹介すると一、二月が「ジャニーズ・アイランド」、二、三月が「エンドレス・ショック」、四、五月が「レ・ミゼラブル」、六、七、八月が「エリザベート」、十月が「ラ・マンチャの男」、十一月が「ダンス・オブ・ヴァンパイア」、十二月が「ジャニーズ・アイランド」だった。クリエも同様でミュージカルが主流。一月は「レベッカ」、二月が「キューティ・ブランド」、四月が音楽劇「ライム、ライト」、五月が「ジャニーズ銀座」、六月が「クラブ7」、七月がジャニーズ事務所のふぉゅーの「ショー・ボーイ」、九月は若草物語」、十月は恋の骨折り損」、十一月は

「ビッグ・フィッシュ」、十二月は「ロカビリー・ジャック」と新旧のミュージカルが並んだ。ミュージカル以外の公演としては、三月前半のプレミア音楽朗読劇「ヴァイサリオ」で、藤沢文翁作、脚本、演出、小杉紗代作の舞台。19世紀にロンドン塔に幽閉された囚人を巡る物語で、声優の山寺宏一と上川隆也、林原めぐみが出演した。後半はオグ・マクデューノ原作、笹部博司脚本、鶴山仁演出の「十二番目の天使」で、妻と息子を交通事故で亡くして絶望していたエリートが、少年野球チームの監督になり補欠選手を育成することとで再起する姿を描いたヒューマンドラマ。井上芳雄、栗山千明らが出演した。八月前半にはケラリー・サンドロヴィッチの岸田賞受賞作（1998年）を鈴木裕美が演出した「フローズン・ビーチ」を上演した。近未来を舞台に女性四人の16年に亘る関係性を描いた不条理劇で鈴木杏、ブルゾンちえみ、花乃まりあ、シルビア・グラブが出演した。日本の現代作家の作品を新演出で上演する企画の第一弾で面白い舞台に仕上がった。十一月にはイギリスの現代作家のA・K・キャンペルの「ブラッケン・ムーア 荒野の亡霊」を上村聡史演出、岡田将生、木村多江らで上演した。20世紀前半のイギリスを舞台にしたゴシックホラーの形を取りながら、旧世代と新世代の価値観の相違やジェンダーの問題など様々な重い問題を問いつけた作品で優れた舞台に

なった。立川三貴がとくに光った。この作家の作品はこれまで新劇が上演してきた。二つの公演はクリエの新路線として注目される。

明治座は一月が由紀さおり公演で、後半は前川清50周年記念のコンサート。二月の前半は17年に初演した豊川悦司作、池田テツヒロ脚本、ラサール石井演出「夫婦漫才」。幼馴染の男女が漫才師として生きる姿を笑いと涙で綴った作で、大地真央、中村梅雀が主演した。

後半は水谷千恵子のコンサート、三月の前半は水森かおり、後半は北島三郎のコンサート。三月末から四月半ばは皆川博子原作、中屋敷法仁脚本、田尾下哲脚本、演出の「ふたり阿国」。かぶき踊りの祖といわれる阿国と彼女に憧れ二代目阿国を名乗る女を巡る物語で、北翔海莉が初代、峯岸みなみが二代目を演じ、玉城裕規、モト冬樹、坂元健児らが共演した。後半に「銀河鉄道劇場版」を上演した。

五月はロングセラーになっている谷崎潤一郎作、菊田一夫脚本、堀越真潤色、水谷幹夫演出「細雪」。四姉妹は順に浅野ゆう子、一路真輝、瀬奈じゅん、水夏希が演じ、葛山信吾、磯部勉、太川陽介、川崎麻世らが共演した。六月は坂本冬美で泉ピン子が友情出演し、一部が芝居。二部がコンサート。七月は中村雅俊の45周年記念公演で、鹿目由紀脚本、鴻上尚史脚本、演出「勝小吉伝」を上演した。真山青果の「天保遊俠録」などで知られる勝海舟の父の小吉の物語で、中村の小吉で賀来千香

子、田山涼成、東啓介、寺脇康文らが共演した。八月前半は恒例の志村けん一座で「姫二太郎三かぼちゃ」と「バカ殿」コントなど。後半はももクロ一座で、座長の佐々木彩夏主演の「姫はくの一」と、ももいろクローバー大いに歌うの二本立て。九月前半は長谷川町子原作、田村孝裕脚本、演出の「サザエさん」。10年後のサザエさん一家を描いた物語で、藤原紀香がサザエさん、松平健が波平、高橋恵子がフネ、葛山信吾がマスオを演じたが凡作だった。後半は博多名物の辛子明太子を作った夫婦を主人公にした東憲司脚本、演出の人情劇「めんたいびりり」。15年に博多座で初演した舞台の引つ越し公演で、博多華丸と酒井美紀が夫婦を演じ、大空ゆうひ、小松政夫、藤吉久美子らが共演した。十月は五木ひろしの「歌・舞・奏スベシヤル」。十一月は有吉佐和子作、原田諒潤色・演出の「ふるあめりかに袖はぬらさじ」。有吉戯曲を音楽劇に再構成した作品で、大地真央が芸者お園を演じて18年に初演して今回は再演。矢崎広、中島亜梨紗、温水洋一、佐藤B作、横内正らが共演した。十一月末から十二月前半は日本テレビ製作の鈴木哲也脚本、深作健太演出の「里見八犬伝」。佐野勇斗、松田凌、蛸洲匠らが八犬士を演じた。歳末には恒例の活劇時代劇「麒麟」の「る」を上演した。今年も大衆路線を貫いたが、お馴染みの「細雪」以外には特に優れた舞台は見当たらないまま終わつた。

た。劇場制作の舞台が減り、貸し劇場が増えてきている。

他の劇場では三越劇場が四月に川島雄三生誕百年記念で「幕末太陽伝」を、七月に藤間勘十郎文芸シリーズとして自ら台本、演出の「怪談牡丹燈籠」を上演し、北村有起哉、北翔海莉らが出演した。九月に松井誠脚本、演出「清水次郎長伝」を上演、松井のほかに瀬戸内美八、内海光司、品川恵子らが出演。

赤坂ACTでは七月後半から八月にかけて劇団☆新感線が倉持裕作、いのうえひでのり演出「☆むりの軍団」を上演した。古田新太ら劇団員のほか早乙女太一、清野菜名らが出演した。ホリプロは七月によりうり大手町ホールで村上春樹原作、フランク・ギアラティ脚本、倉持裕演出「神の子どもはみな踊る」を、古川雄輝、松井玲奈、木場勝己らで上演、九月に世田谷パブリックシアターで三谷幸貴作、演出「愛と哀しみのシャロロック・ホームズ」を上演した。二作品とも面白い舞台に仕上がった。日本青年館でアール・ユビーが羽原大介、李相日作、河毛俊作総合演出、岡村俊一構成、演出「フラガール」を上演した。同名の映画の舞台化である。八月にエイベックスがサンシャイン劇場で河原雅彦演出でアカサ・クリスティー作「オリエント急行殺人事件」を上演した。

東京都豊島区が旧公会堂跡に豊島区民芸術文化劇場を建設、11月に開場した。客席数は

1300の大劇場で、東京建物が名称権を獲得しBrillia HALL東京建物と名付けられた。貸劇場として運営し、東宝、ホリプロなどで大手プロダクション制作の演目を上演していく。柿落し公演には宝塚歌劇の「ロックオペラ モーツァルト」を上演した。また東京芸術劇場前の広場に架設式の野外劇場も新設した。池袋地区は芸術劇場、区民劇場、あうるすぽつなど多くの劇場を持つ大演劇街になった。

前進座は一月に京都駅にある京都劇場で山田洋次監修、脚本、小野文隆演出の「裏長屋騒動記」を上演した。17年に国立劇場で上演した作品の再演で、春と秋に全国各地を巡演した。五月の国立劇場公演は瀬川如皐作、平田兼三改訂、小野文隆演出の「佐倉義民伝」を久し振りに通し上演し、51年振りに「仏光寺祈念の場」を復活した。嵐芳三郎の宗五郎、河原崎國太郎のおさんで、藤川矢之輔が甚兵衛と光然を演じた。九、十月には真山青果作「鼠小僧次郎吉」を中嶋宏太郎、早瀬栄之丞ら若手主体の配役で名古屋、大阪、東京で上演した。そのほか「柳橋物語」、「くずし屑屋でござい」、「ひとごころし」、「ちひろ」を全国各地で上演した。

名古屋御園座は松竹、東宝、宝塚歌劇などが制作した舞台を交互に上演した。一月は松平健と中村美津子で「暴れん坊將軍」とコンサート、二月は前半が舟木一夫シアターコン

サート、後半が梅沢富美男と香西かおり、三月が五木ひろしで「雨あがる」とコンサート、四月が花形歌舞伎、五月は前半がミュージカル「笑う男」、中盤が東宝の「雪まろげ」、後半が水森かおり。六月は「レ・ミゼラブル」。七月は前半が前川清と杜このみで「弥次喜多」とコンサート、後半は吉本新喜劇。八月は前半が「ピーターパン」、後半が志村けん一座と名古屋をどり、九月は坂東玉三郎舞踊公演、新橋演舞場で上演した「蘭RAN」、新派の「黒蜥蜴」と「家族はつらいよ」、十月は顔見世、十一月は細川たかし、ダチョウ倶楽部、十二月は「ダンス・オブ・ヴァンパイア」、吉本爆笑公演というラインナップだった。一か月公演が少なく短期公演を繋ぐプログラムが多い。これで分かるように名古屋から西は東京に比べて依然として商業演劇の人氣は低迷しているようである。

松竹座は一月が歌舞伎。二月は上方落語の祖である元禄時代の米沢彦八を主人公にした木下昌輝原作、森脇京子脚本、堤泰之演出の「天下一の軽口男」で、駿河太郎が主演し田中美里、室龍太、谷村美月らが共演した。三月は関ジャニ、四月は新橋演舞場で上演した「トリッパー遊園地」の引越しと、OSKレビュー、五月は藤山直美の「笑う門には福来る」で七月に演舞場でも上演した。六月は有吉佐和子原作、小幡欣治脚本、齋藤雅文演出「三婆」で、大竹しのぶ、キムラ緑子、渡辺えり

が共演した。七月は歌舞伎。八月は東京で上演したジャニーズ事務所の「少年たち」。九月は新派で「家族はつらいよ」と「黒蜥蜴」の二本立て。十月は短期公演の貸し劇場、十一月は松竹新喜劇錦秋特別公演で、新派で上演した作品を山田洋次自身が新喜劇向けに改作した「家族はつらいよ」と「舞妓はんと若旦那」を上演した。十二月は関西テレビの人氣シリーズを舞台化した「大阪環状線」でジャニーズ事務所所の寺西拓人と室龍太が主演、赤井英和が共演した。

新歌舞伎座は一月が五木ひろしと天童よしみの「歌合戦」。二月後半は梅雀と大地真央の「夫婦漫才」。三月は前川清と神野美伽の公演。四月は東宝製作の「雪まろげ」。五月は前半が水森かおり、中盤から水川きよしの公演、六月は松平健、川中美幸公演で中村玉緒が特別出演した。七月市川由紀乃、八月は梅沢富美男劇団、九月は三山由紀乃、八月は梅沢富美男劇団、九月は三山由紀乃公演で、後半が福田こうへい公演。十月は短期公演が多く、十一月に舟木一夫が、十二月に吉幾三がそれぞれ公演した。東京の舞台の引き越し公演が多いことが目につくが、歌手公演も依然として多い。東京に比べて演歌の人氣が高く、氣楽に楽しめる舞台が喜ばれているようだ。

梅田芸術劇場とシアタードラマシティは今年もミュージカルが主流で、帝劇やクリエで上演した作品の上演や宝塚歌劇の公演が多

かった。

京都の南座は一月前半が松竹新喜劇で「裏町の友情」と「お祭提灯」を上演、月半ばからは新橋演舞場で上演した「有頂天団地」の引越し公演。二月は初出演となる滝沢秀明演出の「滝沢歌舞伎ZERO」で盛況だった。三月は玉三郎公演、四月は「都をどり」、五月は「京都ミライマツリ2019」と題して、若手クリエイターが手掛ける観客参加型の「アソビシステム」を上演した。六月は新作歌舞伎「NARUTO」、七月は「OSKレビューiN KYOTO」と題して「海神別荘」を上演した。八月は三年前から幕張メッセで上演してきた「超歌舞伎」の初の劇場公演で、NTTのテクノロジーが開発したバーチャルキャラクターの初音ミクと歌舞伎の獅童が共演する実験的公演。若い観客が詰めかけ20年も公演する。九月は花形歌舞伎、十月は藤山直美公演で三田純市原作、宮永雄平脚本、浅香哲哉演出「道頓堀ものがたり」を再演した。十一月は前半が五木ひろしのコンサートで、後半はジャニーズ事務所の「虎者」。十二月は吉例の顔見世であった。

博多座は一月前半がミュージカル、後半は島津重矢、二月が宝塚歌劇宙組、三月が花形歌舞伎、四月が明太子を作った夫婦の姿を綴った東憲司作、演出の「めんたいびりり」で15年に博多座で初演した舞台の再演。博多華丸、酒井美紀が主演した。後半は「雪まろげ」

五月は武田鉄矢、コロケと九州出身の人氣者が共演する「水戸黄門」と二人のショー、六月が歌舞伎、七月が「三婆」、八月が「レ・ミゼラブル」、九月が劇団☆新感線のいのうえ歌舞伎の初公演、十月前半は明治座から引つ越した「サザエさん」、後半は同じく「ふるあめりかに袖はぬらさじ」、十一月はAKB48の公演、十二月は恒例になっている地元への貸し出しであった。

今年も優れた演劇人を沢山送ることになった。哲学者で三代目市川猿之助のスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」、「オグリ」などの作品を

二〇一九年の現代演劇

平成から令和への時代の転換期に、一人のカリスマ的な人物が亡くなった。SMAAP、嵐など人気男性アイドルグループを育てたジャニー喜多川さんである。ジャニーさんは、2000年に帝劇で堂本光一主演「SHOCK」を初演するなど、商業演劇でジャニーズ公演を定着させた。

一方で、蜷川幸雄演出の帝劇公演「唐版滝の白糸」に岡本健一、同じく蜷川演出「盲導犬」に木村拓哉を出演させるなど、蜷川さんとの親しい関係からアイドルの現代劇出演の口火を切った人だった。森田剛、妻夫木聡、

書いた梅原猛（1月、93歳）、日本文化を広く世界に紹介し歌舞伎や文楽にも精通していたドナルド・キーン（2月、96歳）、ジャニーズ事務所の総帥で多くの人気タレントを育成したジャニー喜多川（7月、87歳）、「オペラ座の怪人」、「ウェストサイド物語」など多くのミュージカルを制作したハロルド・プリンス（7月、91歳の各氏が相次いで死去した。俳優では市原悦子（1月、82歳）、山田スミ子（2月、73歳）、佐々木すみ江（2月、90歳）、京マチ子（5月、95歳）、高島忠夫（6月、88歳）、中山仁（10月、77歳）、八千草薫（10月、88歳）、山

小栗旬、松坂桃李、三浦春馬、菅田将暉などドラマや映画で人気の若手スターが舞台に主演する公演が増え、観客層も広がっているが、その道筋をつけた人でもある。

夏には、劇団活動の難しさを象徴する事態が起こった。劇作家成井豊を中心とした演劇集団キャラメルボックスが活動を休止した。

「ナツヤスミ語辞典」公演終了後に、公式サイトで「活動休止」を報告。さらに実質的な運営会社も負債を抱えて倒産した。看板俳優だった上川隆也の退団後、観客動員が減り、赤字が増えたという。若い観客を集めた人気劇団

谷初男（10月、85歳）、木内みどり（11月、69歳）、今村文美（12月、61歳）、小島慶四郎（12月、88歳）、舞台美術家の島次郎（4月、73歳）、宝塚歌劇の作、演出家の柴田侑宏（7月、87歳）、劇作・演出家の森泉博行（7月、74歳）、中島淳彦（12月、58歳）劇作、演出、評論家の堂本正樹（9月、85歳）の各氏である。謹んでご冥福を祈りたい。

林 尚之

だっただけに、演劇界に衝撃が走った。

野田秀樹が英国のロックバンド「クイーン」の伝説的なアルバム「オペラ座の夜」からモチーフを得て作・演出したNODA・MAP「Q」（主演松たか子、上川隆也）は、シェークスピアの「ロミオとジュリエット」をベースに2人が生き延びたという設定で、時代を源平の日本に移して展開。戦いで引き裂かれた2人のラブ・ストーリーに、時代を超えた祈りのメッセージが「クイーン」の名曲とともに見る者の心を揺さぶった。「Q」は読売演劇大賞最優秀作品賞、初舞台の広瀬すずは同作の

演技で紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞した。

日本を代表する演出家の栗山民也は、天安門事件をめぐる米国と中国の若者の姿を描いたルーシー・カークウッド作「チャイメリカ」(田中圭)、家を出たノラの15年後を描いたルーカス・ナス作「人形の家 Part 2」(永作博美)、アルメニア人迫害をもとにしたリチャード・カリノスキー作「月の獣」(真島秀和)、イングリッド・ベルイマン作「リハーサルの後で」(一路真輝)など多様な作品を演出した。

鶴山仁は、人生に絶望した男の再生を描くオグ・マンディノ作「十二番目の天使」、監獄で苦役を強いられた2人の男を主人公にしたアソル・フガード作「アイランド」(石橋徹郎)、舞台芸術学院創立70周年記念公演の別役実作「この道はいつか来た道」(金内喜久夫)、仕事を失ったシングルマザーの逆襲を描くデビッド・リンゼイ作「グッドビーブル」(戸田恵子)などを演出した。

森新太郎は、教師プラトノフと4人の女性との愛が描いたチューホフ作「プラトノフ」(藤原竜也)、シェークスピア作「ハムレット」(菊池風磨)、老未亡人と黒人運転手の交流が温かいアルフレッド・ウーリー作「ドライビング・ミス・デ이지」(草笛光子・市村正親)、サリバン先生が三重苦のヘレン・ケラーを導くウィリアム・ギブソン作「奇跡の人」(高畑充希)など意欲作が続いた。

上村聡史は、シアター風姿花伝プロデュースで2組の夫婦が言葉のバトルを繰り広げるラーシュ・ノレーン作「終夜」(岡本健一)、アレクシ・ケイ・キャンベル作の愛と再生の物語「ブラッケンムーア」(岡田将生)、ヤスミナ・レザ作「正しいオトナたち」(真矢ミキ)を手掛けた。

劇作家では、大阪を拠点とする「iaku」主宰の横山拓也の活躍が目立った。障がい者の性の問題に向き合った「ヒトハミナ ヒトナミノ」(加藤虎之介)、乳がんとなった大学生の娘と母との心情を大阪弁で紡いだ「あつい胸さわぎ」(枝元明)の秀作を生んだ。

ケラリーノ・サンドロヴィッチの新作「ドクター・ホフマンのサナトリウム」カフカの第4の長編(多部未華子)は、カフカの未完の長編が発見されたらとの発想から生まれ、カフカ愛が詰まった舞台だった。

松尾スズキは、ユニット「東京成人演劇部」を立ち上げ、安藤玉恵との二人芝居で、ドキュメンタリー志望の女子大生が「8050問題」の親子を取材する中で翻弄される「命、ギガ長ス」を作・演出した。

谷賢一は福島原発を舞台にした福島三部作「夜に昇る太陽」「メビウスの輪」語られたがる言葉たち」を上演した。福島の子供たちからこつた原発誘致騒動から、東日本大震災による事故までを、現地の念入りな取材をもとにした大作で、「メビウスの輪」は鶴屋南北戯

曲賞を受賞した。

KAKUTA 桑原裕子は、元受刑者たちの平和な暮らしが震災で崩壊する「らぶゆ」(みのすけ)、読売文学賞を受賞した「荒れ野」(平田満)を再演した。

赤堀雅秋は、震災から8年後に被害で悩まされる集落を舞台にした「美しく青く」(向井理)、警備員の男がボランティア女性に声を掛けられたことから日常が変わる「神の子」(大森南朋)を上演した。

モダンスイマーズの蓬莱竜太は劇団20周年公演「ビューティフルワールド」で、引きこもり男と愛されない主婦の純愛を描いた。

岩松了は、内戦下で反政府軍の若者たちの心の揺れを描く「空ばかり見ていた」(森田剛)、嫉妬から物語は不穏な方向へと進む「二度目の夏」(東出昌大)を作・演出した。

イキウメの前川知大が作・演出した「終わりのない」(山田裕貴)は、ホメロスの叙事詩「オデュッセイア」をもとに、日常と宇宙をつなげる旅を描くSF的舞台で、主演の山田は芸術祭新人賞を受けた。

三谷幸喜は、シャーロック・ホームズ誕生を描いた「愛と哀しみのシャーロック・ホームズ」(柿沢勇人のほか、新作歌舞伎「月光露針路日本」で歌舞伎座に新しい風を吹き込んだ。

劇団チヨコレートケーキの古川健は、障がい者施設の殺傷事件に想を得た「拝啓、衆院

議長様」、戦地慰問で兵士に笑いを届けた夫
婦漫才が主人公の「芸人と兵隊」(柴田理恵)、
満洲開拓団の悲劇を描いた「血のように真っ
赤な夕陽」を手掛けた。

バドックス定数の野木萌葱は、新国立劇
場に初進出し、北京原人を発見した古生物学
者の司祭の葛藤を描いた「骨と十字架」を小川
絵梨子演出で上演。和田憲明演出で再演され
た「三億円事件」は芸術祭優秀賞を受賞した。

トラッシュマスターズの中津留章仁は、地
方都市の洋食屋を舞台にベトナム人技能実習
生との心の交流を描く「異邦人」(檜山文枝)を
劇団民藝で作・演出したほか、小さな町の豪
雨による混乱が悲劇を招く「オルタリテイ」、
東日本大震災直後に発表された「黄色い叫び」
を再演した。

温泉ドラゴンでは、追う者と追われる者の
戦いに迫った佐々木譲の同名小説をもとにし
たシライケイタ作「五稜郭残党伝」、日本初の
女性劇作家長谷川時雨の半生を描く原田ゆう
作「渡りきらぬ橋」を上演。

シリアル・ナンバーの詩森ろばは、コン
ドーム開発に取り組む男たちを主人公にした
「コンドーム0001」で、歌を交えてショウ
アップした。

JACROWの中村ノブアキは、東京五輪
後の23年の状況を描くオムニバス「フイク
ション」を上演したほか、青年座に得意の企
業ものと家庭劇を融合した「DNA」を書き下

ろした。

新劇系劇団では、文学座が充実した公演を
見せた。伊藤博文暗殺の安重根を主人公にし
た鐘下辰男作、西川信広演出「寒花」を再演
し、テネシー・ウィリアムズ作、高橋正徳演
出「ガラスの動物園」、戦時中に陶器の貨幣を
作ろうとした実話をもとにした佃典彦作、松
本祐子演出「銭陶貨」、アトリエの会では、
成井昭人作、所奏演出「いずれおとらぬト
ントントン」、クロアチアの4代にわたる女た
ちの壮絶な物語のテーナ・シュティヴィチツ
チ作、松本祐子演出「スリーウインターズ」、
松原俊太郎作、今井朋彦演出「メモリアル」を
上演。亀田は「ガラスの動物園」の演技で紀伊
国屋演劇賞、「スリーウインターズ」は「悲劇
喜劇」賞、小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞し
た。

民藝は、明治末の東京を舞台に若い女性の
成長と自立を描く池端俊策・河本瑞貴作、丹
野郁弓演出「正造の石」、永井荷風最後の日々
を描く吉永仁作、中島裕一郎演出「新・正午
浅草 荷風小伝(水谷貞雄)」、ヒトラーに抗
した弁護士とその母を主人公にしたマーク・
ヘイワース作、丹野演出「闇にさらわれて」、
中津留章仁作・演出「異邦人」。戦争の悲劇を
今に伝える小山祐土作、丹野演出「泰山木
の下で」(日色ともゑ)は、北林谷栄主演か
ら17年ぶり上演だった。

俳優座は、古川健作、川口啓史演出「血のよ

うに真っ赤な夕陽」、19世紀末の米国の豪農
夫婦殺人事件の真実に迫るシャロン・ポー
ラック作、原田一樹構成・演出「血のつなが
り」。4人の俳優が21役を演じるニック・ペ
イン作、眞鍋卓嗣演出「インコグニート」は刺
激的な舞台だった。

青年座は、米国のラストベルトといわれる
大都市の人々の心が現実によって歪んでいく
リン・ノッテージ作、伊藤大演出「SWEA
T」、原爆投下直前の人々の日常が切ない井
上光晴原作、小松幹生脚色、鈴木完一郎演出
「明日―1945年8月8日・長崎」、中村
ノブアキ作、宮田慶子演出「DNA」、同じマ
ンションに住む3人の女性の日常を描く松
田正隆作、金沢菜乃英演出「東京ストーリー」
を上演した。

文化座は、石牟礼道子「苦海浄土」を原作に
杉浦久幸脚本、栗山民也演出「アニメの海」は
水俣病をめぐる群像劇。文明を拒否し、絶対
的な平和の中に生きるアーミッシュの人々を
主人公にしたアン・チスレット作、鶴山仁演
出「地にありて静かに」を上演した。

青年劇場は、亡き妻の料理レシピをきつ
けに夫が再出発する福山啓子作、関根信一演
出「つながりのレシピ」、飯沢匡没後25年記念
で、皇族一家を通して戦争の本質に迫る飯沢
作、藤井ごう演出「もう一人のヒト」、生徒の
嘘が女教師の悲劇を招くりりアン・ヘルマン
作、藤井演出「子供の時間」を上演した。

演劇集団円は、アインシュタイン来日で人々に起こる騒動を描く吉田小夏作・演出「アインシュタインの休日」、金田明夫がシェークスピア作、小川広平演出「ベニスの商人」でシャーロックに挑んだ。

劇団扉座は、横内謙介作・演出で、手塚治虫の漫画「どろろ」をもとにした「新浄瑠璃百鬼丸」のほか、「リボンの騎士」県立鷺尾高校演劇部奮闘記2019、戦前の喜劇作者菊谷栄を主人公にした「最後の伝令 菊谷栄物語」1937津軽「浅草」は余韻が残る作品だった。

劇団昂は、乗っ取り屋との攻防が痛快なジュリー・スターナー作、小笠原響演出「アザー・ピープルス・マネー」他人の金」、往年の人気喜劇役者二村定一の姿が切ない中島淳彦作、黒岩亮演出「君恋しーハナの咲かなかった男」、毒のある会話が笑いを誘うトレイシー・レッツ作、田中壮太郎演出「8月のオーセージ」を上演した。

劇団浅敷童子は、サジキドウジ作、東憲司演出「骨ノ憂鬱」「獣唄」を上演し、その舞台成果で紀伊国屋演劇賞の団体賞を受賞した。また、「獣唄」に主演し、心筋梗塞のため途中降板した村井国夫も同賞個人賞を受けた。

東京演劇集団風は、松兼功作、浅野佳成演出「ヘレン・ケラー」ひびき合うものたち」、ブレヒト作、江原早哉子演出「コーカサスの白墨の輪」、浅野構成・演出の詩劇「10番目の

詩女神ムーサ」を上演した。

テアトル・エコーは、ポール・スマイス作、永井寛孝演出「バグ・ポリス」、マーク・トウェイン作、平野智子上演台本・演出「I S H E D E A D ?」画家ミレーの知られざる秘密」で、ともに喜劇の劇団らしい笑い満載の舞台だった。

東演は、シェークスピア作、ベリヤコーヴィッチ演出「マクベス」、シライケイタ脚本、松本祐子演出「獅子の見た夢」戦渦に生きた演劇人」は戦前の演劇人の苦闘を描く佳作だった。

公共劇場では、新国立劇場の小川絵梨子芸術監督が就任2年目に入った。翻訳劇シリーズ「ことぜん(個と全)」は個人と国家の関係をテーマにしたもので、第1弾は設定をロシアの木賃宿から日本の工事現場に移したゴリキー作、五戸真理枝演出「どん底」、第2弾はノルウエーのウトヤ島の銃乱射事件をモチーフにしたデビッド・クレッグ作、瀬戸美咲演出「あの出来事」(南果歩)。第3弾のラジヴ・ジョセフ作、小川演出「タージマハールの衛兵」(成河、亀田佳明)は、人間のあり方を問う寓話劇。

フルキャストオーディションによる上演も始め、第1弾がチェーホフ作、鈴木裕美演出「かもめ」で、第2弾が「どん底」。そのほか、名古屋で活動する少年王者館が新国立初登場し、天野天街作・演出「1001」、野木萌葱

の新作「骨と十字架」、ロバート・アイク作、上村聡史演出「オレスティア」(生田斗真)を上演。特に女性演出家の起用が目立った。

野田秀樹が芸術監督を務める東京芸術劇場では、次世代の役者・演劇人のための修行の場「東京演劇道場」がスタート。オーディションで60人が合格し、ワークシヨップを経て、20年に第1回公演の予定。公演では、兵庫県立芸術文化センターと共同製作したフロリアン・ゼレール作、ラディスラス・シヨアール演出「Le Pere父」(橋爪功、若村麻由美)は認知症の父と娘を通して、愛の残酷さを描いた喜劇。橋爪は読売演劇大賞と最優秀男優賞を受賞した。岩井秀人作・演出の音楽劇「世界は一人」(松たか子)、シェークスピア作、熊林広高演出「お気に召すまま」(満島ひかり)を上演した。

神奈川芸術劇場では、ジョン・バートンとケネス・カヴァンダー編、杉原邦生演出「グリークス」がギリシャ悲劇をもとにした上演時間10時間の大作で、ラップなどを取り入れた現代的な演出が際立った。秋元松代の名作「常陸坊海尊」が、19年に芸術参与に就任した長塚圭史の演出、白石加代子の主演で上演された。

世田谷パブリックシアターは、映画愛にあふれたケラリーノ・サンドロヴィッチ作・演出「キネマの恋人」(妻夫木聡)、少年2人の冒険が瑞々しい、ヴォルフガング・ヘルンドル

作、小山ゆうな演出「チック」(柄本時生)と、初演で高い評価を受けた作品の再演が続いた。座・高円寺はレバートリー公演として、巨大軍需企業を舞台にしたエドワード・ボンド作、佐藤信演出「男たちの中へ」を初演し、恒例のピアノと物語「アメリカン・ラブソディ」「ジョルジュ」を上演した。

さいたま芸術劇場は、芸術監督だった蜷川幸雄氏の半生を描いた藤田貴大作、井上尊晶演出のリーディング「蜷の綿」、さいたまネクス・シアター世界最前線の演劇第3弾のガンナーム・ガンナーム作、眞鍋卓嗣演出「朝のライラック」は、武装組織に占領された中東の町に起こる悲劇に戦慄する舞台だった。

プロデュース公演では、井上ひさし作品を上演するこまつ座は、井上ひさし没後10年のメモリアルイヤーとして、栗山民也演出「木の上の軍隊」(山西惇史)、最後の戯曲の栗山演出「組曲虐殺」(井上芳雄)、鶴山仁演出「日の浦姫物語」(朝海ひかる)、田中麻衣子演出「どうぶつ会議」、長塚圭史演出「イーハトーボの劇列車」(松田龍平)、鶴山演出「化粧二題」(内野聖陽、有森也美)と、意欲的に上演した。

シスカンパニーはヤスミナ・レザ作、ケラリーノ・サンドロヴィッチ上演台本・演出で大竹しのぶ、段田安則、稲垣吾郎、ともさかりえ出演「LIFE LIFE LIFE」人生の3つのヴァージョン、カルロ・ゴール

ドーニ作、福田雄一上演台本・演出「恋のヴェネチア狂騒曲(ムロツヨシ)、アリエリ・ドーフマン作、小川絵梨子演出「死と乙女」(宮沢りえ)、北村想の日本文学シリーズ第6弾は坂口安吾作品をモチーフに寺十吾演出「風博士」(中井貴一)と、多彩な演目が並んだ。

トム・プロジェクトは、ふたくちつよし作・演出「萩咲く頃に」(音無美紀子)、古川健作、日沢雄介演出「芸人と兵隊」、北村想作、日沢演出「A列車に乗っていこう」(石田ひかり)、「風間杜夫ひとり芝居」で水谷龍二作・演出の平和三部作「正義の味方」「ピース」あの時代を二挙上演。水俣病患者一家の差別と戦う姿を描く、ふたくち作・演出「風を打つ」(音無美紀子)では音無が芸術祭優秀賞を受賞した。

パルコステージは、平田オリザ作、本広克行演出「転校生」を女子校版と男子校版で交互上演したほか、手塚治虫生誕90周年記念の中屋敷法仁上演台本・演出「奇子」(五関晃一)を初演。蓬萊竜太作、栗山演出「母と惑星について、および自転する女たちの記録」(鈴木杏)、寺山修司作、美輪明宏主演・演出「美術「毛皮のマリー」を再演した、20年1月から新パルコ劇場が開場した。

ホリプロは、2人の天才の架空の出会いを描いたステイヴ・マーティン作、ランダル・アーニー演出「ピカソとアインシュタイン

ン」星降る夜の奇跡」、村上春樹原作、蜷川幸雄演出「海辺のカフカ」、大災害の起きた東京を舞台にした長塚圭史作、吉田鋼太郎演出「アジアの女」(石原さとみ)、藤原竜也、鈴木亮平が小学生に扮した蓬萊竜太作・演出「渦が森団地の眠れない子たち」、菅田将暉が主演したアルバール・カミュ作、栗山演出「カリギュラ」と幅広い作品を製作した。

加藤健一事務所は、クリフォード・オデッツ作、松本祐子演出「喝采」、レイ・クーニ作、加藤健一演出「パパ、I LOVE YOU!」を上演した。

地方発では、富山・利賀村を拠点とする鈴木忠志が日ロ同時開催の「シアターオリンピックス」を行い、世界各国から第一線の演出家・俳優が集結し、鈴木演出「ディオニュソス」などを上演した。静岡県舞台芸術センターの宮城聡も「アンティゴネ」のニューヨーク公演を成功させ、「マハバラータ」の野外公演を東京・池袋で行った。

水戸芸術館は宮崎駿監督の初期作品「最終前線」を舞台化。芸術監督井上桂の脚本、一色陸司演出、内野聖陽主演で成果を上げた。

海外からの来日公演では、東京芸術劇場が招聘したロシアの「レッドトーチ・シアター」のチェーホフ作、ティモフェイ・クリャピン演出「三人姉妹」はすべて手話で演じ、身ぶりや表情で表現する出色の舞台。チュリフィッシュ岡田利規がタイのウティット・ヘーマ

ムーン原作で、自ら脚本・演出した「プラータナー…憑依のポートルート」はタイ人俳優との共同作業で、激動する政治に翻弄されながら性愛遍歴を重ねる芸術家の姿を描く4時間強の大作舞台だった。

2019年のミュージカル

ミュージカルと銘うった公演は、2・5次元作品まで加えると数え切れない。ブロードウェイ・ミュージカルはじめウエストエンド、オーストリア、フランス、韓国とさまざまな国のミュージカルが上演される。そんな中でジャーニー育ての親で演出家ジャーニー喜多川氏の死去は、日本のエンターテインメントにとって大きな損失と言えよう。

新作に挑戦の劇団四季

劇団四季創立メンバーで演出家の浅利慶太氏の一周忌(7月13日)の年に当たり、自由劇場を拠点に4月から「浅利慶太追悼」5作品連続公演が行われた。オリジナルミュージカル「ユタと不思議な仲間たち」(4月19日〜5月6日)、「ジーザス・クライストススパースタ」(エルサレムバビジョン、5月18日〜6月2日)、「エビータ」(6月17日〜7月7日)、「ミュージカル 李香蘭」(7月27日〜8月12

19年も多くの演劇人が亡くなったが、中でも劇作家の中島淳彦さんは58歳の若さで急逝だった。9月に劇団昂で「君恋しーハナの咲かなかった男」が上演されたばかりだった。

日)。「思い出を売る男」(12月21日〜28日)は、加藤道夫の詩的感覚が凝縮された。浅利演出事務所の制作を含めて良質の舞台を創り上げた。

新作は2本。1951年の映画をミュージカル化した「パリのアメリカ人」(クレイグ・ルーカス台本、アイラ・ガッシュウィン作詞、ジョージ・ガーシュウィン作曲、クリストファー・ウィーランド演出・振付、ボブ・クロリーリ装置・衣裳デザイン)で、2015年ブロードウェイで上演され、トニー賞4部門を受賞した。第二次世界大戦直後、ナチス占領の影を引きずるパリを舞台に若者たちの夢をすべてダンスで表現する難易度の高い作品である。スターに頼らずオーディションで選ばれた無名の俳優たちが実力を発揮した(1月20日〜3月8日 東急シアターオーブ、3月19日〜8月11日 K A A T 神奈川芸術劇場、名古屋、京都と続く)。

横溝 幸子

もう1本は新作ファミリーミュージカル「カモメに飛ぶことを教えた猫」(ルイス・セブルベダ原作、劇団四季企画開発室脚本・作詞、宮崎誠作曲、山下純輝演出)。1993年の「歌は友たち」以来26年ぶりの新作だ。黒猫ゾルバは息絶え絶えの母カモメから卵を託され、仲間と力を合わせて約束を守る話。「勇気をもつて一歩踏み出す大切さ」が描かれている。「はだかの王様」と共に児童招待プロジェクト「こころの劇場」として全国178都市で443回公演を行い、56万人の児童が観劇した。「ライオンキング」が12月20日、ロンドンラン上演21周年を迎えた。総入場者数は1298万人を越え、総公演回数1万2334回(2019年12月31日公演終了時)と日本演劇史上最多記録を樹立した。2021年4月「四季劇場」[夏]から四季の新たな専門劇場「有明四季劇場」に移る。「キャッツ」は11月11日、日本上演36周年を迎えた。

総公演回数1万267回に達した。大井町地区再開発のためキャッツシアターは21年夏に閉館する。

2019年は東京、大阪、京都、名古屋、札幌、仙台、福岡、全国公演を含めて全公演回数は3181回、332万人を動員。総売り上げ額は241億円が見込まれ、前年比で16億円増と好調を維持している。

2020年夏、東京・竹芝地区にJ.R.東日本四季劇場「春」が開場。9月10日から「春」でデイズ・ニーム・ミュージカル「アナと雪の女王」を上演することが発表された。

トップ交替の宝塚歌劇団

創立105周年の宝塚歌劇団は、伝統の継承と新しい時代への挑戦を目指した一年間であった。宝塚大劇場の観客動員も103.3%と好調。東京宝塚劇場その他の公演を含めて280万人、ライブビューイング(40万人)を加えると320万人以上と過去最高の動員数だ。

トップスター2人が卒業した。星組の紅ゆずる・綺咲愛里トップコンビが「GOD of STARS―食聖(小柳奈穂子作・演出)、スペース・レビュー・ファンタジー「Eclair Brillant」(酒井澄夫作・演出)で10月13日、東京宝塚劇場を最後に卒業した。紅は88期生。2002年星組「プラハの春」で初舞台、16年トップ就任。36年ぶり

再演の菊田一夫の名作「霧深きエルベのほとり」のカールで男の哀愁を漂わせたが、本来はサービス精神旺盛のコメディエンス。新星組は礼真琴と舞空瞳のトップコンビでフレンチ・ミュージカル「ロックオペラ モーツアルト」(ドーブ・アチア作曲、石田昌也潤色・演出)でプレお披露目(12月5日、15日池袋・東京建物Brillia Hall)した。モーツアルトとサリエリ(風七瑠海)の対立を前面に出した作品で面白い。

百周年を支えた花組明日海りおが、ミュージカル「A Fairy Tale―青い薔薇の精」(植田景子作・演出)、レビュー・ロマンス「シャルム」(稲葉太地作・演出)で11月24日卒業した。89期生。03年月組「シニョール・ドン・ファン」で初舞台。13年花組へ、14年5月トップ就任。フェアリーで存在感がある男役だった。花組新トップは二番手の柚香光。プレお披露目は20年1月「DANCE OLYMPIA」(東京国際フォーラム ホールC)。

月組「チェ・ゲバラ」(原田諒作・演出)で専科トップの轟悠がゲバラを骨太に演じた。華やかな宝塚の中では異色公演と言える。月組トップの珠城りょうは、年初のブロードウェイ・ミュージカル「ON THE TOWN」(ベティ・コムデン脚本・作詞、アドルフ・グリーン脚本・作詞、レナード・バーンスタイン作曲、野口幸作潤色・演出)で水兵、本公

演の「夢現無双」(吉川英治作「宮本武蔵」より齋藤吉正脚本・演出)では、宮本武蔵で美称りかの佐々木小次郎と対決。年末のウィーン・ミュージカル「I AM FROM AUS TRIA」故郷は甘き調べ(デイトウス・ホフマン&クリスティアン・シュトワベック脚本、ラインハルト・フエンドリツヒ作詞・作曲、齋藤吉正潤色・演出)では、ホテルの御曹司と硬軟の役柄で実力を発揮した。

雪組の望海風斗は「ファントム」(アーサー・コピット脚本、モリー・イエストン作曲、中村一徳潤色・演出)のあとミュージカル・コメディ「20世紀号に乗って」のプロデューサー役、「壬生義士伝」(浅田次郎原作、石田昌也脚本・演出)では、新選組に参加する下級武士。宙組の真風涼帆は「オーシャンズ11」(小池修一郎脚本・演出)に続く「イスパニアのサムライ」(大野拓史作・演出)では伊達政宗の護身役の剣士と幅広い役柄に取り組んだ。

第五十五回「宝塚舞踊会」(10月29日 宝塚大劇場)は奉祝をテーマにした「祝舞御代燈」。轟悠の「振袖菊」は若衆姿、松本悠里の「奉祝明治松竹梅」はたおやか。日本舞踊の演目が少ない現在では貴重な催しである。

百五期生40人が初舞台を踏み、松岡修造の長女稀惺かずとが注目された。一方紅ゆずる、明日海りおの男役トップ、仙名彩世、綺咲愛里ら娘役トップのほか、男役の七海ひろ

き、美弥るりか、娘役花野じゅりあ、純矢ちとせら実力派も卒業。退団者は一年間で44人。OGでは八千草薫さん⁸⁸が10月24日、演出家の柴田侑宏氏⁽⁸⁷⁾が7月19日に亡くなった。

再演で新人起用の東宝

帝国劇場はジャニーズ公演が5カ月。あとは「レ・ミゼラブル」(4月19日～5月28日)、「エリザベート」(6月7日～8月26日)、「ラ・マンチャの男」(10月4日～27日)、「ダンス・オヴ・ヴァンパイア」(11月5日～27日)と再演物を並べたが、新人がWキャストに加わり、ある意味で新鮮な舞台になっている。

「レ・ミゼラブル」では、佐藤隆紀のバルジャン、上原理生、伊礼彼方のジャベール、斎藤司のテナルディエ、濱田めぐみのファンテーヌ、屋比久知奈のエポニーヌ、「エリザベート」も愛希れいかのタイトルロールに古川雄大の死の帝王トート、「プリシラ」で美女ぶりを見せた山崎育三郎が暗殺者ルキーニと意外性の配役が興味につながる。

日本初演50周年記念「ラ・マンチャの男」(セルバンテス原作、デール・ワッツサーマン脚本、ジョオ・ダリオン作詞、ミッチ・リー作曲、松本白鸚演出)は、1969年初演時の市川染五郎が九代目松本幸四郎、二代目松本白鸚と名前が変わっても一貫してセルバンテス、アロンソ・キハナ、ドン・キホーテを

演じ続けてきた。75歳になっても「見果てぬ夢」を追い続ける役者の執念が凄い。

「ダンス・オヴ・ヴァンパイア」(ミヒヤエル・クンツェ脚本・歌詞、ジム・スタインマン音楽、山田和也演出)は、山口祐一郎の伯爵の存在感が光る。宿屋の娘サラは、神田沙也加のほか乃木坂46出身の桜井玲香が新参加。佐藤洋介、森山開次のヴァンパイアダンサーが素晴らしい。

シアタークリエも「レベッカ」「キューティール・ブロンド」「ライムライト」「ビッグ・フィッシュ」と再演物が多い。

ホリプロは「オペラ座の怪人」の10年後を描いた「ラブ・ネバー・ダイ」、こまつ座と提携の「組曲虐殺」「スクルージ」を再演したほか「ピーターパン」は39年目を迎えるロングヒット作だ。

梅田芸術劇場の「ロミオとジュリエット」(ジェラルド・プレスギュルヴィック音楽、小池修一郎潤色・演出)のロミオ(古川雄大・大野拓朗)、ジュリエット(木下晴香・生田絵梨花)は前回と同じ顔ぶれだが、新演出版の再演になる。「天使にラブソングを」のデロリス役に森公美子のほか朝夏まなとが加わった。アミューズは「キンキーブーツ」を再演。Pカンパニーの「はだしのゲン」(壁の中の妖精)は地道に再演を続けている。音楽座も「グッバイマイダーリン」(7 dolls)と名作の再演で再起した。

話題豊富な初演作品

東宝が手がけた「ナターシャ・ピエール・アンド・ザ・グレート・コメット・オブ・1812」(デイブ・マロイ脚本・作詞・音楽、小林香演出)は、トルストイの「戦争と平和」の一部をミュージカル化した作品。貴族の非嫡出子ピエール(井上芳雄)は愛のない結婚をして本ばかり読んでいた。伯爵令嬢ナターシャ(生田絵梨花)は不倫するが最後はピエールに救われる。2012年のオフ・ブロードウェイ同様劇場をレストラン風に改造した客席一体型(1月5日～27日 東京芸術劇場プレイハウス)。「笑う男」(ロバート・ヨハンソン脚本、フランク・ワイルドホーン音楽、上田一豪演出)は、ビクトル・ユゴーの同名小説のミュージカル化。18年韓国初演作品。見世物にするために口を裂かれたグウィンブレン(浦井健治)に女王の妹ジョシアナ公爵(朝夏まなと)が関心を寄せる。本当の醜さとは何かが問われる作品だが全体に暗すぎる(4月9日～29日 日生劇場)。

シアタークリエの初演作「Little Women」(若草物語)(ルイーザ・メイ・オルコット原作 アラン・ニー脚本、シンディ・ディックスタイン歌詞、ジェイソン・ハウランド音楽、小林香演出)は、05年ブロードウェイ初演作品。作家を目指す次女ジョーの朝夏まなとが自立心の強い行動的な女性を好演した。彩乃かなみの長女、井上小白合の

三女、下村実生の四女。「ラヴズ・レイバーズ・ロスト」恋の骨折り損は村井良大、三浦源介ら若手たちが活躍した。

『ピピン』（ロジャー・ハートソン脚本、ステイヴン・シュワルツ作詞・作曲）は、日本でも上演済みだが、今回は13年のダイアン・パウルスの新演出版。神聖ローマ帝国チャールズ大帝の息子ピピン（城田優）の自分探しの旅。一座をサーカス団に設定し、演技にアクロバットを取り入れた大胆な舞台で、狂言回しのなりディンク・ブレイヤー役のクリスタル・ケイもフォックススタイルのダンスを踊る。ピピンの祖母（中尾ミエ・前田美波里）も、アクロバットを披露しながら歌うのには驚かされた。難解とされた舞台が視覚面でわかりやすくなった。フジテレビ、キョードー東京、ワタナベエンターテインメント主催・企画・製作（6月10日〜30日 東京シアターオーブ）。「フアントム」もうひとつのオペラ座の怪人（アーサー・コピット脚本、モリー・イエストン作詞・作曲）は、城田優の主演・演出作品。エリックの幼さ、強さ、儚さのほか宝塚よりも残忍性を強調した。エリックは城田と加藤和樹、クリステイヌは愛希れいかと木下晴香、シャルドン伯爵は廣瀬友祐と木村達成。梅田芸術劇場製作（11月9日〜12月1日 赤坂ACTシアター）。

『FACTORY GIRLS』は、ブロード

ウェイのソングライティングコンビ（クレイトン・アイロンズ&ショーン・マホニー）と日本版脚本・演出の板垣恭一の合作によるロック・ミュージカル。19世紀半ばのアメリカ。紡績工場で働くサラ（柚希礼音）は編集長ハリエット（ソニン）の雑誌に寄稿するうちに労働組合の必要性を説き始める。闘う女のミュージカルだが、女性同士の心情などは荒削り。アミューズ製作（9月25日〜10月9日 赤坂ACTシアター）。

映画をイアン・ソフトリ監督自ら舞台化した『BACKBEAT』（石丸さち子演出）は、ビートルズ創成期のハンブルグ時代の青春群像。デビュー直前の1962年に21歳で夭折したペーシストのスクエア・サトクリフ（戸塚祥太）にスポットを当てた。ジョン・レノン（加藤和樹）、ポール・マッカートニー（JUNON）、ジョージ・ハリスン（辰巳雄大）、ピート・ベスト（上口耕平）が、初期のビートルズサウンドを演奏する。シイエイタイプロデュース製作（5月25日〜6月9日 東京芸術劇場プレイハウス）。

360度客席が回転するステージアラウンド東京で、来日公演の「ウェストサイド・ストーリー」に続き、日本語バージョン第一弾（11月6日〜20年1月13日）が開催された。トニー（宮野真守・蒼井翔太）、マリア（北乃きい・笹本玲奈）、アニータ（樋口麻美・三森すずこ）、リフ（小野田龍之介・上山竜治）、ベ

ルナルダ（中河内雅貴・水田航生）と若手が揃った。

松竹製作「ベテン師と詐欺師」（ジェフリー・レイン脚本、デイヴィッド・ヤズベック作詞・音楽、福田雄一上演台本・演出）は、凄腕の詐欺師ローレンスの石丸幹二に対して若さだけで未熟な詐欺師フレディには山田孝之を起用した（9月1日〜26日 新橋演舞場）。

ホリプロの初演作「ストーリー・オブ・マイ・ライフ」（ニール・バートラム作詞・作曲、ブライアン・ヒル脚本、高橋正徳演出）は、同郷の男2人の人生の物語。都会に出て人気作家になったトーマスと地元に残り平凡な生活のまま急逝したアルヴィン。この2人を田代万里生と平方元基が交互に演じた（10月9日〜16日 よみうり大手町ホール）。

シェイクスピアの「テンペスト」をミュージカル化した世界初演作「ラ・テンペスタ」（トム・ジョーンズ脚本・作詞、アンドルー・ガッレル作曲、勝田安彦演出）。福井貴一がプロスペローを演じ、かなりの難曲をこなした（11月20日〜24日 萬劇場）。

多彩なオリジナル作品

江戸川乱歩の「怪人」を探偵（森雪之丞脚本・作詞、杉本雄治音楽、白井晃演出）は、元子爵夫妻（今拓哉・樹里咲穂）の一人娘大原櫻子）が財閥の息子（中川晃教）との婚約をめぐり、怪人二十面相（中川二役）と明智小五郎

(加藤和樹)が対決する(9月14日〜29日 K A T)。

昭和初期、恋人の杉本良吉と樺太から国境を越える大胆な行動をとった女優の岡田嘉子が、イツツフォーリーズの手で「YOSHIO KOー悔いなき命を」(大谷美智浩作・作詞、吉田さとの音楽、鶴山仁演出)というミュージカルになった。新派女優の竹内京子や井上道場ら関係者が実名で登場。水野貴以が岡田のそっくりさんを演じた。福井貴一が弁士で説明した(1月10日〜16日 紀伊國屋ホール)。

フランスの有名なファッション・デザイナー「イヴ・サンローラン」(荻田浩一・演出、斉藤恒芳音楽)のミュージカルはなんとなくそぐわない感じだ(2月15日〜3月3日よみうり大手町ホール)。歌舞伎の「白浪五人男」が音楽活劇「SHIRANAMI」(G2脚本・演出)となり、音楽はラテン系ジャズを使った。早乙女太一、龍真咲、伊礼彼方、喜矢武豊、松尾貴史が五人男を演じる異色顔ぶれ(1月11日〜29日 新国立劇場中劇場)。ロボットとの共存を描いた「boybe」を初演したミュージカル座は「ひめゆり」「スター誕生」など再演を含めて年間18作品を上演し、健闘した。

大人向きのおしゃれな感じの恋物語が「君の輝く夜に」(鈴木聡作・演出、佐山雅弘音楽)だ。海岸通りのホテルに宿泊した2人の女(安寿ミラ・中島亜梨沙)がかつての恋人が

忘れられない男(稲垣吾郎)と出会う。安寿がミステリータッチの不思議な魅力をもたえた女性を好演。ホテル経営者(北村岳子)を含めたのショートタイムが楽しい(8月30日〜9月23日 日本青年館ホール)。再演物だが、「母さん」(堀江安夫作、新垣雄音楽、横山由和演出)でサトウ・ハチローの母と娘鳩子(二役)、「音楽劇 人形の家」(ヘンリック・イブセン作、宮原芽映作詞、上田亨作曲・音楽、西川信廣演出)でノーラを演じた土居裕子が、紀伊國屋演劇個人賞を受賞した。

『Endless SHOCK』20周年

帝国劇場を5カ月間独占するジャニーズ事務所は健在。社長で演出家のジャニー喜多川氏が7月9日、87歳で亡くなった。後継者は滝沢秀明。新橋演舞場で上演してきた「滝沢歌舞伎」は、「滝沢歌舞伎ZERO」(4月10日〜5月19日)のタイトルで若手たちが継承した。

堂本光一の「Endless SHOCK」(2月4日〜3月31日)は20周年を迎えて、完程度の高いエンターテインメントショーになった。若手たちの「ジャニーズ・アイランド」はジャニー喜多川の集大成的作品で年末年始の2カ月を独占。「DREAM BOYS」はKing & Princeの岸優太が主役をつとめた(9月3日〜27日)。

日生劇場は「少年たち」(9月7日〜28日)、

「ジャニーズ伝説2019」(10月7日〜29日)、シアタークリエでふぉくゆーが「SHOW BOY」(7月10日〜28日)、T r a v i s J a p a n が「虎者 N I N J A P A N」(11月2日〜10日 サンシャイン劇場)と若手グループが熱演している。そんな中で屋良朝幸はオリジナルミュージカル「THE CIRCUS」(T E T S U H A R U 企画・構成・演出・振付)のケントを主演し、「ロカビリー☆ジャック」(森雪之丞作・作詞・楽曲プロデュース、岸谷五朗演出)で歌いまくるなど1人での活躍が目立つ。

S M A P に続きアイドルグループ「嵐」の2020年末での活動休止が発表された。

渡辺謙の「王様と私」

東急シアターオーブでの来日公演がふえている。最高の舞台は渡辺謙主演の「王様と私」である。2015年ブロードウェイで上演。渡辺はトニー賞最優秀男優賞にノミネートされた。アンナ役のケリー・オハラがトニー賞主演女優賞、チャン夫人のルーシー・アン・マイルズが最優秀助演女優賞を受賞した。18年のロンドン公演を経てオリジナルキャストがそのまま来日(7月11日〜8月4日)したのは珍しい。渡辺は王様の威厳を保ちながら好奇心と茶目つ気旺盛という見事な王様ぶりで、英語の台詞もなめらか。ケリー・オハラとの「シャル・ウィ・ダンス」は息もびつた

り。世界に通用する存在感を示した。

「シカゴ」(8月7日・18日)も米倉涼子のロキシー・ハートは3度目。英語もうまくなり、努力の積み重ねを示した。ヴェルマ役のアムラ・フェイ・ライトはさすがの貫禄で、ブロードウェイでの実力を示した。

映画を舞台化した「ボデイガード」(9月13日・10月6日)はホイットニー・ヒューストンのヒット曲の数々が入った。「ブラスト」(8月20日・9月1日)は2003年の初来日以来12回目。今回はデイズ・ニ音楽で楽しくまとめた。マシュー・ボーン「白鳥の湖」(7月11日・21日)オーチャードホール)は男性ダンサーが扮する白鳥たちの迫力が凄い。「ウエストサイド・ストーリー」はIHISテージャラウンド東京(8月19日・10月27日)での長期公演で体力勝負の感じだった。年末には「サタデー・ナイト・フィーバー」(12月13日・29日 国際フォーラムホールC)が来日した。

ミュージカル・ベスト10

2019年のミュージカル界の傾向を知る上で「ミュージカル」誌選出(評論家・ジャーナリスト23名)の「ミュージカル・ベスト10」が参考になる。

「作品BEST10」の第1位は、東急シアターオーブで上演された劇団四季の「パリのアメリカ人」(演出・クリストファー・ウィー

ルドン)に決まった。第2位以下は「ピピン」(フジテレビジョン・キョードー東京・ワタナベエンターテインメント製作 演出・ダイアン・パウルス)「FACTORY GIRLS」私が描く物語」(アミューズ・イーラス 演出・板垣恭一)「Little Women」若草物語」(東宝 演出・小林香)「ナターシャ・ピエール・アンド・ザ・グレート・コメット・オブ・1812」(東宝ニッポン放送 ミックスゾーン 演出・小林香)「ファントム」もう一つのオペラ座の怪人」(梅田芸術劇場 TBS キョードー東京 演出・城田優)「チェ・ゲバラ」(阪急電鉄 宝塚歌劇団(月組) 演出・原田諒)「笑う男」(The Eternal Love」永遠の愛」(東宝 演出・上田一豪)「20世紀号に乗って」(阪急電鉄 宝塚歌劇団(雪組) 演出・原田諒)「ペテン師と詐欺師」(松竹 フジテレビジョン 演出・福田雄一)

再演賞「ラ・マンチャの男」(東宝 帝国劇場 演出・松本白鸚)

演出家賞 小池修一郎(「エリザベート」「オーシャンズ11」ロミオ&ジュリエット)「男優Best10」の第1位は、1969年の初演以来「ラ・マンチャの男」を演じ続けてきた75歳の松本白鸚が選ばれた。第2位以下は井上芳雄(「グレート・コメット」「エリザベート」他) 城田優(「ピピン」「ファントム」市村正親(「ラブ・ネバーダイ」「スクールジ」

川平慈英(「ビッグ・フィッシュ」)浦井健治(「笑う男」「ビッグ・フィッシュ」)伊礼彼方(「レ・ミゼラブル」)第8位は石丸幹二(「ラブ・ネバーダイ」)ペテン師と詐欺師」他と三浦春馬(「キンキーブーツ」)が並んだ。第10位が堂本光一(「Endless Shock」)

「女優BEST10」の第1位は宝塚歌劇在籍中から演じ続けてきた花總まり(「エリザベート」)が選ばれた。第2位以下は、朝夏まなと(「Little Women」)天使にラブ・ソングを」他)第3位は生田絵梨花(「グレート・コメット」「キレイ」他)とクリスタル・ケイ(「ピピン」)第5位は明日海りお(「A Fairy Tale」)「CASA NOVA」他)と春風ひとみ(「壁の中の妖精」他)第7位は望海風斗(「ファントム」)「20世紀号に乗って」他)と柚希礼音(「FACTORY GIRLS」)「LEMONADE」第9位はソニン(「FACTORY GIRLS」)「キンキーブーツ」)と愛希れいか(「エリザベート」「ファントム」)。女優陣はベテランに加わり若手が台頭し、実力と人氣が伯仲している。

2019年の地方演劇から

大阪市に劇場型文化集客施設クールジャパンパーク大阪がオープン

一九年二月、大阪のシンボル・大阪城公園東側に三つのホールを持つ劇場型文化集客施設クールジャパンパーク大阪がオープンした。関西の各テレビ局、電通、吉本興業など民間企業十四社が運営会社を構成、ホール名称がWWホール(客席一一三八)、演劇・ミュージカルの専門劇場TTホール(客席七〇二)、小規模演劇や古典芸能、ライブを兼ねたSSホール(客席三〇〇)、スタンディング六〇〇人)。明石家さんまがホール命名者でWWは「笑い」、TTは「楽しい」、SSは「すごい狭い」が命名の理由とか。

こけら落としはWWホールが二十五日から(八月二十五日)よしもとクリエイティブ・エージェンシー企画制作によるデジタルアートや歌舞伎、ダンス、殺陣で構成した日本総狂宴ステージ「KEREN」(高平哲郎脚本・演出)、TTホールではさんま・岡村隆史(ナインティナイン)主演による二十三日のみの公演「花の駐在さん」、SSホールは二十五日から三日間の日程で能や文楽・落語などの「上方伝統芸能おめでたづくし」で賑やかに幕

を開けた。SSホールでは九月に関西演劇祭2019「お前ら、芝居たるか!」が十劇団参加で開かれた。

大阪城公園内には大阪城ホール、大阪城音楽堂、道路を隔てた近くに千三十席の森ノ宮ピロティホール(元大阪市立労働会館)がある。ピロティホールは敷地の一角に森ノ宮遺跡があるため高床式(ピロティ)構造として二〇一〇年に新装開場、劇団やカンパニーの関西ツアーの常連劇場になっている。中心街からやや離れているもののクールジャパンの仲間入りで大阪城公園一帯が関西演劇活動の貴重な拠点になりそうだ。

Theatre E9 Kyoto 始動、大阪駅前新劇場

前号で触れたアーツシード京都(あごうさとし代表理事)の小劇場「Theatre E9 Kyoto」(約百人収容、京都市南区東九条南瓦町)が完成。六月二十二・二十三日に狂言「三本柱」上演でこけら落とし。相次ぐ小劇場消失を危惧した京都の演劇・文化人たちが立ち上げた「百年続く小劇場」で、館長に茂山あきら(狂言師)、支配人に蔭山陽太(元

森 洋 三

京都ロームシアター支配人)、芸術監督にあごうさとし(元アトリエ劇研芸術監督、劇作・演出家)がそれぞれ就任。オープニングプログラムにMONO、サファリ、九条劇、壁の花、地点、笑いの内閣、東京から青年団、南アフリカのネリシウエ・ザバのパフオーマンスなど多彩な公演が行われた。

一方、二五年五月から半年間にわたって開かれる大阪・関西万博に合わせてJR大阪駅西側に駅直結の二〇〇〇一三〇〇席規模の新劇場建設が発表された。新劇場は一六六年まで大阪城公園の一角に在ったシアターBRAVA!(旧大阪MBS劇場)の後継劇場ということになる。日本郵便・西日本旅客鉄道・大阪ターミナルビル・JTBの四社による「梅田3丁目計画(仮称)」としてホテル・商業施設のある地上三十九階建て高層ビルの五八階に新劇場(BRAVA同様、毎日放送グループが運営予定)が誕生する。

こうした新劇場への動きは別にして、日本第二の大都市であるにもかかわらず大阪には盛んな小劇場演劇などを支え、創造発展の基盤となる演劇専用の公立劇場、複数の中小劇場を持つ芸術センターがなく、関西演劇人た

ちに久しく望まれている。

「シアター・オリンピックス」など盛況の世界演劇祭

東京・池袋地区の劇場などを会場に国内外の演劇・パフォーマンスを集め「東京芸術祭 2019」(宮城聡総合ディレクター)静岡県舞台芸術センター芸術総監督)が池袋演劇祭と連携して九月から二か月間、盛大に開かれたが、一九九年は世界演劇祭が各地で行われ、それぞれに大きな注目を集めた。

日本において初めての世界演劇祭が行われたのは一九八二年の鈴木忠志(早稲田小劇場、現SCOT主宰、公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議初代理事長)による「利賀フェスティバル」だった。その「世界演劇の聖地TOGA」で日本開催が二十年ぶりの「第九回シアター・オリンピックス」が八月二十三日から一カ月の日程で日本・ロシア共同開催として開かれた。日本は利賀(富山県南砺市、利賀芸術公園)・黒部(富山県黒部市宇奈月温泉、宇奈月国際会館・前沢ガーデン)の両地区、ロシアでは六月十五日〜十二月十五日の期間にサンペテルブルク(国立アレクサンドリンスキー劇場ほか)を会場に開かれた。同オリンピックスは一九九三年に鈴木忠志、ロバート・ウィルソン、ユリー・リュビエーモフら世界で活躍する演出家・劇作家によりギリシャのデルフォイで創設され、九五年からギ

リシャを皮切りに八カ国で開催されてきた。日本開催は九九年四月の第二回以来、前回は一八年にインド(ニューデリーほか十六都市)で開かれている。二国の共同開催は今回が初めてで、鈴木忠志、ヴァレリー・フォーキン(アレクサンドリンスキー劇場芸術総監督)がそれぞれ開催地の芸術監督を務めた。

今回は創立メンバーのロバート・ウィルソン(米国)をはじめ世界十六カ国の参加。日本は鈴木演出「リア王」デリオソス、平田オリザ(青年団主宰、舞台芸術財団演劇人会議理事長)作・演出「東京ノート」、宮城聡演出「天守物語」、中島諒人(鳥の劇場芸術監督)演出「剣を鍛える話」、金森稜(りゅうとび)あ新潟市民芸術文化会館舞踊部門芸術監督)演出・振付「still/speed/silence」ほかが披露された。利賀・黒部を合わせ三十公演、ほかにトーク、シンポジウム、ワークショップを繰り広げ、人口はほぼ五百人の利賀地区に二万人が訪れる盛況ぶりだったという。(早稲田小劇場)現SCOTの創立メンバーで国際的に知られた俳優・葛森皓祐が七月七日、稽古中に急性心不全で死去。七十六歳。合掌)

また中国、韓国、日本の開催地持ち回りによる演劇交流、世界文化への発信を目指し九四年に発足した「BeSeTeo演劇祭26」が三年ぶりの日本開催。十月二十六日〜十一月十七日(週末開催)に鳥取市鹿野町の鳥の劇場は

かで、「鳥の演劇祭12」との連携で開かれた。BeSeTeo演劇祭の日本側国際委員には平田オリザ代表、中島、金森、志賀亮史(茨城県土浦市の劇団百景社主宰)、重政良恵(劇団SCOT制作)が名を連ね、五会場を舞台に普遍的劇団(韓国)の「記憶の場所」、国立上海ドラマ芸術センター(中国)の「原野」、志賀演出による百景社「授業」のほか、フィンランドの人形劇団などの上演があった。

環日本海ベルトラインの大きな演劇的連帯

演劇祭の関係者をやや意図的に多数挙げたのは、現代の日本の演劇的状况の中に新潟市のりゅうとびあ、富山県南砺市の利賀、そして鳥取市の鳥の劇場の連携を見るためである。加えて、演劇を正課に取り入れた国公立大学では初めての国際観光芸術専門職大学(仮称)が日本海に面した兵庫県豊岡市で設立準備が進み、プレイベント的な「第0回豊岡演劇祭」が加わってきた。

同演劇祭は九月六日から三日間の開催だったが、平田が芸術監督を務める城崎国際アートセンター(KIAC)のホール、スタジオ、百年の歴史を持つ歌舞伎小屋の出石永楽館を会場に、柿喰う客「御披露喜」初演、青年団「東京ノート・インターナショナルバージョン」などが上演された。会場周辺でトヨタ・モビリティ基金提供の超小型電気自動車「コムス」無料貸し出し、リストバンド型電子チケット

など実験的な試みも行われた。フェスティバル・ディレクターを務めた平田(国際観光芸術専門職大学学長候補)は「国内では例を見ないフリンジ型(自主参加型)の国際的な演劇祭を目指す」としている。

豊岡ではKIAACがすでに稼働、「豊岡演劇祭」が国際演劇祭へと飛躍していく環境は整っている。そうすると前記のりゅうとぴあ、利賀、鳥の劇場に加え新たに豊岡が参画することで、環日本海ベルトラインの大きな演劇的連帯が誕生することになる。日本の演劇界は首都・東京を中心軸に名古屋・大阪(京阪神)の東名阪ラインが中心的な状況にあるが、国際演劇祭で連携する環日本海ベルトラインが拮抗する形になってくれば、演劇状況にどんな進展が起きてくるのか。これは地方演劇の域を超えて見逃せない。

紙数の関係で簡単に触れるが、四月二十七日から五月六日まで静岡芸術劇場、舞台芸術公園他を会場に「ふじのくに・世界演劇祭」が二十年目を迎えた。海外組の四公演をはじめSPAC静岡舞台芸術センター芸術総監督の宮城聡構成・演出による野外劇「マダム・ボルジア」のほかフリンジスタイルの劇団ままごと、ロロなどが市街地で無料公演を行った。十月五日(二十七日には十回目)を迎えた「京都国際舞台芸術祭」が演劇やダンス、音楽、美術などが京都ロームシアター、Theatre E9 Kyotoなどを会場に

開かれ、二月九日から九日間の日程で「国際舞台芸術ミーティングin横浜2019」が神奈川芸術劇場、横浜赤レンガ倉庫、一部は東京でも国内外のパフォーミング・アーツ約五十公演が行われている。

地方劇団が生み出した佳品の地域密着創作劇

新国立劇場に名古屋市の人気劇団「少年王者館」が登場、五月に主宰者の天野天書書き下ろし、演出の「1001」を上演した。同劇団のファンだったという小川絵梨子演劇部門芸術監督の推挙で実現したが、売り切れ続出の人気公演になり、各地の演劇人たちに大きな関心で迎えられた。地方演劇界では人気・知名度の高い作家・作品の上演頻度が高い傾向にあるが、地域劇団のバイタリティーを見せたケースもある。

名古屋市熱田区に本拠を構える劇団名古屋(合川伸彦代表が一七年十二月に上演した創作劇「あ・り・が・と」が、一九年五月に演劇集団和歌山(和歌山市)が、十月には劇団きづがわ(大阪市)によって相次いで上演された。劇団名古屋は創立六十年を超し、社会派演劇を数多く上演している老舗劇団。作者の麻創けい子は名古屋地区を中心にテレビ・ラジオドラマ、「女の庫」などの舞台劇、脚本家育成に第一線で活躍中の劇作家・演出家。障害児を抱えた母親の自叙伝から劇化されたが、劇団とモデルの女性との二十年にわたる交流、

さらに地域福祉会の母親たちと朗読劇をつくり劇団企画としてクリスマス会などで上演してきたという背景が同戯曲を生み出した。障害者(児)問題は地域・国境を越えた社会の大きな課題で、それを地域に密着して掘り起こし劇化した創作劇が他地域の劇団によって相次いで上演された。地域劇団ならではの在り方、創造活動の一例として示唆することが多いように思われる。

一方では創立五十周年記念を迎えたばかりの劇団かすがい(兵庫・尼崎市)が九月のファイナル公演で活動を停止した。兵庫県立尼崎高校定時制演劇部OBによって設立され、公害や戦争と平和などシリアスなテーマを追求した作品を上演してきたが、稽古場維持費など財政面、新しい劇団員が入ってこないなどが理由という。いま地域劇団は劇団員減少、財政的不安などで苦難の時代を迎えている。そんな中で地域に腰を据え、地域特性を活かしながら頑張る劇団活動の一端を。

【上半期】(一月)十二・十三日、幻灯劇場(京都市)が人間座スタジオで五周年記念「盲年」(藤井颯太郎作・演出)を、十三・十四日、劇団ZIG・ZAG・BITE(福岡市)がぼんブラザホールで「新・幕末純情伝」(つかこうへい作、到生演出)を。二十四・二十七日、劇団エレガント(福岡市)がぼんブラザホールで「鷹作 鬼城縁起」(到生作・演出)

を、二十六〜二月二日、演劇プロデュース企画MAM(札幌市)がシアターZOOで「父と暮せば」(井上ひさし作、増澤ノゾム演出)をそれぞれ上演。(二月)二・九・十六・二十三日、大帝ボベ(熊本市)が続Rude BarでボベA公演(今宵、分裂する世界と癒着するいくつかの嘘)(川津羊太郎脚本、井上ゴム演出)を、八〜十日、大阪劇団協議会プロデュース公演(企画・関西芸術座として吹田メインシアター中ホールで「探偵物語」(シドニー・キングスレー作、菅原卓訳、勇来佳加脚本、松本昇三演出)を、八〜十一日、コトリ会議(大阪市)が福岡市ばんブラザホールで「全部あつたかいものは」(山本正典作・演出)を、二十七〜三月三日、宮崎県立芸術劇場がメディキット県民文化ホールで「新 かぼちゃといもがら物語」(戌井昭人作、立山ひろみ演出)を上演。(三月)九・十日、十六・十七日、劇団埼玉(埼玉・上尾市)が劇団アトリエで「キネマの天地」(井上ひさし作、川村武夫演出)を、十五・十六日、劇団すがお(三重・桑名市)が桑名市コミュニティプラザで「桑名藩戊辰戦記」(内堀の水、常に蒼し)(篠原史記作、石原まさし演出、十五〜十七日、劇団大阪シニア演劇大学(大阪市)がアトリエで「煙が目にしみる」(堤泰之作、金沢宏和演出)を、十七・二十四日、劇団からつかぜ(浜松市)が劇団谷町劇場で創立六十五周年記念「空の村号」(篠原久美子作、平柴俊哉演出)を

上演。(四月)十一〜十四日、劇団名芸(名古屋)が劇団アトリエで「蠅取り紙」(山田家の5人兄妹)(飯島早苗・鈴木裕美作、しものみさえ演出)を。(五月)五・六日、演劇集団和歌山(和歌山市)が県民文化会館小ホールで「あ・り・が・と」(麻創けい子作、山入桂吾演出)を、十一・十二日、劇団きづがわ(大阪市)がリパティおおさかで「鶴彬と暁を抱いて」(吉橋通夫作、松本善久夫ほか脚本、林田時夫演出)を、十七〜十九日、劇団名古屋(名古屋)がアトリエ758で「親の顔が見たい」(畑澤聖悟作、久保田明演出)をそれぞれ上演。十七〜十九日、劇団四紀会(神戸市)が元町プチシアターで「夕日は彼方を真赤に染めて」(森卓也・桜井敏作、岸本敏朗演出)を、二十五日、劇団静芸(静岡市)が静岡市民文化会館中ホールで「マンザナ、わが町」(井上ひさし作、中川正臣演出)を、十五・二十六日、岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)がせきせいホールで「陽気な地獄破り」(木下順二作、井戸千招演出)を上演。(六月)七〜九日、十四・十六日、劇団大阪(大阪市)が谷町劇場で「ハイセイせばHello Goodbye」(畑澤聖悟作、山内佳子演出)を、十三〜十六日、劇団イナダ組(札幌市)がコンカリーニョで「利那イ」(イナダ作・演出)を。十六日、劇団やまなみ(山梨・笛吹市)が笛吹市スコレイセンターで「ハテルマ ハテルマ」(栗原省作、河野通方潤色・演出、十九日、二十

一〜二十三日、劇団はぐるま(岐阜市)が御浪町ホールで「かたりの椅子」(永井愛作、糸永しのぶ演出)。十九〜二十三日、劇団未来(大阪市)が未来ワークスタジオで「ストッパキス」(ダイアナ・ソソ作、しまよしみち演出)を。二十八・二十九日、劇団支木(青森市)がアウガV多機能ホールで「女の一生」(田辺典忠作・演出)を上演。

〔下半期〕(七月)六・七日、劇団津演(三重・津市)がお城ホールで「アトムへの伝言」(横内謙介作、藤井あゆみ演出)を、十二〜十四日、劇団せすん(大阪市)が大阪グリーン会館で「GO・s H I C H I・GO字あまり」(げんだつば作、杉田満演出)を。十八〜二十一日、ギンギラ太陽's(福岡市)が西鉄ホールで「空に消えたロープウエー」(大塚ムネット作・演出、二十六〜二十八日、関西芸術座(大阪市)がABCホールで「大阪城の虎」(かたおかしろう作、松本昇三演出)を。二十七・二十八日、劇団演集(名古屋)がイーブルなごで「残花」1945 さくら隊 園井恵子(詩森ろば作、狩野恭光演出)を上演。(八月)二〜四日、兵庫県劇団協議会が神戸アトビレッジセンターで発足五十周年記念「大正七年の長い夏」(武田芳一原作、小田和夫・桜井敏脚色、岸本敏朗演出)を、二〜四日、よこしまプロッコーリ(名古屋)が千種文化小劇場で二十周年記念公演「ライフ・se i e c t i o n」(にへいたかひろ脚本・演出)

を。二十三〜二十五日、演劇集団よろずや(大阪市)が應典院本堂で「盆がえり」(寺田夢酔脚本・演出)、三十〜九月一日、六〜八日、劇団かすがい(兵庫・尼崎市)がコミュニティシアターAQで結成五十周年記念ファイナル公演「日本一の女」(斉木香津原作、駒々慎脚本、門田裕演出)を上演。(九月一日、劇団ドラマシアターども(北海道・江別市)が斜里町ゆめホール知床公民館ホールで「トド山第三分教所パートIII」(安念智康作、ども演出)、十三〜十五日、劇団演劇関係いす校舎福岡・行橋市)が自宅劇場・守田ん家で「もののみ。」(守田慎之介作・演出)を。二十一〜二十三日、弦巻楽団(札幌市)がサンピアザ劇場で「ユー・キャン・ハリ・ラブ!」(弦巻啓太作・演出)を、二十七〜二十九日、劇座(名古屋市)が人形劇場ひまわりで「かたりの椅子」(永井愛作、岡田一彦演出)を上演。(十月五・六日、十一月二・三日、劇団からつかぜ(浜松市)が劇団アトリエで創立六十五周年記念「高き彼物」(マキノゾミ作、布施佑一郎演出)、十八〜二十日、劇団よこはま座(横浜市)が神奈川芸術劇場で「パーマ屋スミレ」(鄭義信作、濱田重行演出)を上演。十九・二十日、劇団きづがわ(大阪市)がリパティおさかホールで「あ・り・が・と」(麻創けい子作、林田時夫演出)を、二十五〜二十七日、劇団息吹(大阪・東大阪市)が東大阪イコラームホールで「マンザナ、わが町」(井上ひさし

作、大坊晴彦演出)を。(十一月)十四〜十七日、劇団速度(京都市)がシアターE9で「冒した者2019」(三好十郎原作、野村真人構成・演出)を。十五・十六日、劇団山形(山形市)が山形市中央公民館で「俺の酒が呑めない」(古川貴義作、平野礼子演出)、十六・十七日、劇団演劇街(山口市)が演劇研究所LaBで「ママの帰る家」(山下朱実作、柳沢悟演出)を上演。十六・十七日、劇団海鳴り(北海道紋別市)が紋別市文化会館ホールで「殿様と私」(マキノゾミ作、五十嵐陽子演出)、十六・十七日、劇団弘演(青森・弘前市)がスペースデネガで「ぢらい」(森田有脚本、作間しのぶ演出)を。二十二〜二十四日、劇団かに座(横浜市)が新横浜スペース・オルタで「お勝手の姫」(小川未玲作、馬場秀彦演出)を。二十二〜二十四日、二十九〜十二月一日、京浜協同劇団(川崎市)がスペース京浜特設劇場で創立六十周年記念「結婚の申込」(チェーホフ原作、伊賀山昌三脚本、藤井康雄演出)、立体落語「死神」(三遊亭円朝作、護柔一・台本演出)の二本立て上演。二十九〜十二月一日、六〜八日、劇団未来(神戸市)が未来ワークスタジオで「まぼろば」(蓬萊竜太作、しまよしみち演出)を。三十〜十二月一日、劇団どろ(神戸市)が新長田小劇場で「誰も書いてはならぬ」ザ・空気Ver2」(永井愛作、合田幸平演出)を。(十二月)六〜八日、劇団ドリームチョップ(石川・野々市市)が

が金沢市芸術村ドラマ工房で「海へ(令和元年)」(dreamchop作、井口時次郎演出)を、十三〜十五日、穂の国とよはし芸術劇場がPLATアートスペースでプロデュース公演「荒れ野」(桑原裕子作・演出)を、十五日、劇団ショーマンシップ(福岡市)が博多座で創立二十五周年記念「THE NEW AWAKA」(博多の町の芸処」(市岡洋脚本・演出)を。二十〜二十二日、劇団シアター・ウィークエンド(名古屋市)がスタジオ座ウィークエンドで「居酒屋UFO」(後藤明日香作・演出)を、二十一・二十二日、劇団B-I-L-U-C-K-S♪(広島市)が広島市青少年センターで「古と淡々と遊べ!」(鍵谷田脚本、鍵谷・杉山宏一演出)を上演。

二〇一九年のテレビドラマ

話題をよぶ日常系ドラマ

安達奈緒子が描く豊かな人間関係

テレビドラマの話題のバロメーターにSNSのフォロワー数や、ツイート件数が参照されることが多くなった。

昨年に放送された「おっさんずラブ」(テレビ朝日、主演〓田中圭、吉田鋼太郎、林遣都、脚本〓徳尾浩司、プロデュース〓貴島彩理ほか)もそういった現象を生んだドラマだ。ツイート件数が多ければ、「トレンド入り」となる。「#おっさんずラブ」が、世界トレンド1位になり大きな話題になった。

2019年4月に放送されたドラマ24「きのう何食べた?」(テレビ東京)も、ツイッターでの盛り上がりが話題になった。タイトルだけでなく、個性的な存在感を放った脇役・井上航の呼称・ジルベールヌ(磯村勇斗)もトレンド入りを果たした。

弁護士・笈志朗〓シロさん(西島秀俊)は、恋人で美容師の矢吹賢二〓ケンジ(内野聖陽)と一緒に暮らしている。志朗は料理が得意で、仕事が終われば、スーパーでお買い得の食材を買い回り、賢二のために腕をふるう。原作は、よしながふみの同名漫画(2007

年より連載開始/現在も連載中)だが、脚本の安達奈緒子が、この二人のあたたかで豊かな心の機微を巧みに(さりと)紡ぎ出す。

たとえば、夕飯をつくる時間の描写だ。志朗の頭には今日一日の職場であつたことなどが思い起こされる。しかし、そうして料理をつくる手順の折々にも、食べる相手への思いがこぼれる。また、食卓を囲む二人の間にも互いの気持ちのやりとりがある。キャストキングの魅力も大きく、その細やかな表現が際立った。(東京ドラマアウォード2019連続ドラマ部門優秀賞、脚本賞。ギャラクシー賞7月度月間賞ほか)

この「きのう何食べた?」をはじめとして、2019年は脚本家・安達奈緒子の活躍が目立った。火曜ドラマ「G線上のあなたと私」(TBS)も漫画原作だが、その人間関係の距離感とそこに流れる気持ちの描写に確かさがあつた。

25歳の元OL・小暮也映子(波留)は、婚約を破棄され、会社を辞め、ショッピングモールで耳にしたバイオリンの演奏に心を動かされて楽器店の「大人のバイオリン教室」の門をたたく。安達は、そこで同じクラスになった

中町綾子

仲間、19歳の大学生・加瀬理人(中川大志)、41歳の主婦・北河幸恵(松下由樹)、そして、講師の久住眞於(桜井ユキ)との関係のなかに、それぞれが抱える悩みや戸惑いを語っていく。そして、その年齢や性別や仕事にとらわれない触れ合いが、自分を見つめ直すきっかけとなる、といった時間(展開)をゆつくりと見せた。(原作〓いくえみ綾)

日本テレビ

オリジナル脚本ドラマの存在感

日本テレビのオリジナル脚本のテレビドラマに存在感があつた。日曜ドラマ「3年A組——今から皆さんは、人質です——」(1月〜3月)、日曜ドラマ「あなたの番です」(4月〜9月)、土曜ドラマ「俺の話は長い」(10月〜12月)などがそうだ。「あなたの番です」は、交換殺人ゲームをめぐるミステリードラマ、「3年A組——今から皆さんは、人質です——」はクラスメートの自殺をめぐるミステリードラマで、いずれも放送回数を重ねるごとに緊張感の高まるものだった。

とりわけ、「あなたの番です」(日本テレビ)は、1クール(3ヶ月10話)の連続ドラマが多

の中で、2クール(6カ月19話)の放送を達成した。視聴率は初回が、8.3%(ビデオリサーチ調べ/関東地区)だったが、最終回は、19.4%(同)に上昇した。

また、公式ツイッター、公式インスタグラム、LINEの「A菜奈ちゃん」の友だち登録などSNSの情報発信、VOD(ビデオオンデマンド)でのサイドストーリードラマの配信などが注目された。特筆すべきは、視聴者による「考察」だ。視聴者が細部にわたる推理をSNSで発信し番組への興味を掻き立てた。

新婚夫婦の手塚翔太・菜奈(田中圭・原田知世)は、マンシヨンの住民会での世間話が始まって始まった殺人ゲームに巻き込まれる。「殺したい人」の名前を紙に書き、関係者が次々と殺されていく。前半の第1章のラストで菜奈が殺され、後半は「反撃編」となる。登場人物が多く、毎週誰かが殺される。SNS等を通してドラマへの関心を積極的にかきたてるエンターテイメントとしての手法が注目された。(原案・企画〓秋元康、脚本〓福原充則)

「3年A組」今から皆さんは、人質です!」(日本テレビ)はオリジナルの学園ミステリードラマ。卒業式の十日前に担任の柊一颯(菅田将暉)がクラス生徒全員を人質に学校に立てこもる。そして、半年前に自殺したクラスメイト(上白石萌歌)の死について、生徒た

ちに考えさせる「授業」に挑む。

何よりも、本質から目をそらすとする生徒への容赦のない問いかけに緊張感があつた。校舎を爆破したり、不正解ならば誰かに死んでもらうと脅したりと、過激な設定である。しかし、この学園ドラマにはそういったフィクションを通して、教師がいまの若い世代が向き合うべき問いを熱く投げかけていた。(脚本〓武藤将吾、東京ドラマアウオーダー2019連続ドラマグランプリ、主演男優賞・菅田将暉、第56回ギャラクシー賞テレビ部門個人賞・菅田将暉(対象番組は他に『dele』))。

「俺の話は長い」(日本テレビ)は、毎週1時間の放送枠に2話ずつが放送されるスタイルのオリジナル・ホームドラマである。主人公の岸辺満(生田斗真)は、31歳のニートで、母の房枝(原田美枝子)と実家で暮らしている。大学を中退し、夢だった喫茶店を始めたがうまくいかず、以来6年間定職に就いていない。そこに、姉の秋葉綾子(小池栄子)の家族が家のリフォームの間だけと身を寄せる。

食卓では、屁理屈の多い満と、気の強い姉との丁々発止のやりとりが展開される。ドラマはその激しい会話の中に、本音や家族としての思いやりをこぼれさせる。そうして、満はもとより、同居した綾子の夫・光司(安田顕)、娘の春海(清原果耶)らの抱える思いにも光をあて、それぞれのゆるやかな成長を描

いていく。(脚本〓金子茂樹、演出〓中島悟ほか、チーフプロデューサー〓池田健司、プロデューサー〓樋山裕子ほか)

海外ドラマのリメイク作品が多く放送されるなか、オリジナルドラマの魅力あらためて気づかせた1年でもあった。

バラエティ豊かな NHKのドラマ枠展開

NHKの連続ドラマでは、昨年に引き続き、金曜10時台に放送される「ドラマ10」作品が注目された。「トクサツガガガ」(1月〓3月)、「これは経費で落ちません!」(7月〓9月)などがそうだ。

「これは経費で落ちません!」(NHK)の主人公は、入浴剤などを扱う石鹸メーカーの経理部の社員・森若沙名子(多部未華子)で、各部署から持ち込まれる経費を的確に処理し、自分の役割を果たす。そうすることで、各部署の古い風土に切り込み、互いの理解も少しずつ深めていく。組織の硬直を見つめ直し、働く者へのエールを送る。そういった連続ドラマと言っていいだろう。(原作〓青木祐子)「これは経費で落ちません!」経理部の森若さん〓、脚本〓渡辺千穂、藤平久子、蛭田直美。演出〓中島悟ほか)

「トクサツガガガ」(NHK)の主人公、商社に勤める仲村叶(小芝風花)は、特撮ドラマオタクだが周囲にそのことを隠している。それでも、好きなことを大事に、それを共有でき

る仲間と連帯を深める。そんなドラマだ。
 (脚本Ⅱ田辺茂範、原作Ⅱ丹羽庭、演出Ⅱ末永創、ギャラクシー賞3月度月間賞)

土曜の放送枠「土曜ドラマ」では、土曜ドラマ「サギデカ」(NHK)が、第74回文化庁芸術祭テレビ・ドラマ部門大賞、第57回ギャラクシー賞上期奨励賞を受賞するなど、高い評価を得た。

特殊詐欺を題材とする安達奈緒子作のドラマで、警視庁第2課の刑事・今宮夏蓮(木村文乃)が振込め詐欺グループの摘発に奔走する。ドラマは、その今宮刑事と、実行犯のかげ子・加地颯人(高杉真宙)や捜査陣との関わりを中心に、組織犯罪の構造、犯罪者の論理を的確に導き出し、社会にある課題をしつかりと見つめさせた。

そのほか、よるドラ(土曜30分)枠での新作展開も注目された。「腐女子、うつかりゲイに告る」(4月〜6月)、「だから私は推しました」(7月〜9月、主演Ⅱ桜井ユキ、白石聖、作Ⅱ森下佳子)などである。

「腐女子、うつかりゲイに告る」は、ゲイの高校3年生・安藤純(金子大地)とBL(ボーイズラブ)漫画を愛する腐女子・三浦紗枝(藤野京子)がつきあうことから始まるドラマだ。登場人物はいわゆるマイノリティ、ニッチとされる人々だが、その先にあるメッセージがすがすがしい青春ドラマになっていた。(脚本Ⅱ三浦直之、演出Ⅱ益子原誠、上田

明子ほか、原作Ⅱ浅原ナオト、ギャラクシー賞6月度月間賞)

職場の現在、理想を描くTBSドラマ

TBSでは、火曜ドラマ枠、金曜ドラマ枠の女性主人公が目をつけた。

火曜ドラマ「わたし、定時で帰ります」(TBS、4月〜7月)は、ソフトウェア開発会社を舞台に、会社員の戸惑いや個人の考え方の違いに光を当てるドラマである。

第1話のサブタイトルは、「働き方新時代へ! 絶対に定時で帰る女」。2019年4月から一部施行となった「働き方改革関連法案」は、長時間労働が常態化している職場環境を是正しようとするものだ。しかし、その受け止め方には個人差がある。

主人公の東山結衣(吉高由里子)は、定時には仕事を切り上げて、行きつけの料理店で仕事終わりの時間を楽しむ。しかし、長時間勤務やパワハラから抜け出せない同僚や取引先もいる。彼女はその意識をゆるやかに変えていく。ヒロインの軽やかな無理のない生き方の描写は、まさに「働き方改革」への提言となっていた。(原作Ⅱ朱野帰子、脚本Ⅱ奥寺佐渡子、清水友佳子。ギャラクシー賞6月度月間賞)

金曜ドラマ「風のお暇」(TBS、脚本Ⅱ大島里美、原作Ⅱコナリミサト)は、周囲の空気を読む(周囲にあわせて振る舞う)ことに疲れ

て退職し、都市郊外に引っ越した女性(黒木華)の再生を描く。引っ越し先の人びとや彼女に思いを寄せる男性との人間関係を通して、働く女性が職場や母娘関係のしがらみから解放されていく姿が、お暇という日々になんわりと描かれていた。

日曜ドラマ枠の会社や職場を舞台にしたドラマには、今年も安定した人気があった。「集団左遷!!」(4月〜6月、主演Ⅱ福山雅治、香川照之、原作Ⅱ江波戸哲夫、脚本Ⅱいづみ吉紘、演出Ⅱ平川雄一郎ほか)、「ノーサイド・ゲーム」(7月〜9月、主演Ⅱ大泉洋、松たか子、原作Ⅱ池井戸潤、脚本Ⅱ丑尾健太郎、演出Ⅱ福澤克雄ほか)、「グランメゾン★東京」(10月〜12月、主演Ⅱ木村拓哉、鈴木京香、脚本Ⅱ黒岩勉、演出Ⅱ塚原あゆ子、山室大輔ほか)である。

2019年は、9月〜11月にラグビーワールドカップが日本で開催され、ゲーム中継が年間の高世帯視聴率番組の1位、2位を占める(ビデオリサーチ調べ/関東地区)など、大きな盛り上がりを見せた。「ノーサイド・ゲーム」はその直前まで放送され、低迷する企業のラグビー部にゼネラルマネージャーとして着任した君嶋隼人(大泉洋)を主人公に、ラグビーのチームワークを熱く描いた。

単発ドラマ、特別企画ドラマの現在

単発ドラマや特別企画のドラマでは、NH

Kのドラマや各局の開局周年記念番組に秀作が多かった。

NHKスペシャル「詐欺の子」(NHK名古屋)は、実際の事件の綿密な取材のもとに制作されている。特殊詐欺にかかわる加害者、被害者それぞれの人物像を丁寧に描くことで、実行犯である中学生の無自覚な罪の意識、格差社会の渦中にいる若者、そして被害者の苦悩を浮き彫りにする。複雑な犯罪の構造的な側面、多面的な描写、批評精神が際立ったドラマであった。(作〓高田亮、演出〓川上剛、東京ドラマアウォード2019単発ドラマ部門優秀賞、第45回放送文化基金賞番組部門テレビドラマ番組最優秀賞、第56回ギャラクシー賞テレビ部門奨励賞)

「スローな武士にしてくれ」京都 撮影所ラプソディー(NHK)は、ドローンやハイスピードカメラなどNHKの最新機材を時代劇の現場に持ち込んで、その番組制作をメイキングドラマ風に楽しませた。大部屋俳優のシゲちゃん(内野聖陽)が主役に抜擢され、制作スタッフたちも奮闘する。そういった展開のなかに、最新技術と格闘する俳優や作者の熱い魂をコミカルに描いている。(脚本・演出〓源孝志、第74回文化庁芸術祭賞テレビ・ドラマ部門優秀賞、第56回ギャラクシー賞テレビ部門フロンティア賞、第35回ATP賞テレビグランプリ総務大臣賞)

民放キー局の周年記念番組も話題になっ

た。テレビ朝日開局60周年記念5夜連続ドラマスペシャル「白い巨塔」(主演〓岡田准一、松山ケンイチ、脚本〓羽原大介ほか、監督〓鶴橋康夫ほか、原作〓山崎豊子)は、6度目のテレビドラマ化で5夜連続で放送された。

フジテレビ開局60周年特別企画「レ・ミゼラブル」終わりなき旅路(主演〓ディーン・フジオカ、井浦新、脚本〓浜田秀哉、演出〓並木道子、プロデューサー〓太田大ほか)は、1862年発表のヴィクトル・ユゴーの小説を、舞台を平成の30年間に移して大胆に翻案した。(東京ドラマアウォード2019単発ドラマ部門優秀賞)

また、フジテレビ系で2006年に人気を博した「結婚できない男」の続編、「まだ結婚できない男(関西テレビ制作、脚本〓尾崎将也)も、異例の13年ぶりの続編放送で話題になった。唯我独尊で偏屈ものの建築士・桑野信介(阿部寛)は、53歳となっても相変わらず独身生活を続けている。大きな事件も起こらない日々のなかに、桑野らの気持ちコミカルに描かれていた。

ローカル局の周年記念テレビドラマ制作も相次いでいる。

TBCテレビ60周年記念ドラマ「小さな神たちの祭り」(東北放送、脚本〓内館牧子、監督〓松田礼人)が、東日本大震災で家族全員を亡くした若者(千葉雄大)の8年後の気持ちの変化をファンタジックに描いて、文化庁

芸術祭賞優秀賞を受賞した。夕暮れ時に迷い込んだ世界で死者たち(家族や町の人たち)とあたたかく交わる姿を通して、被災者への癒しをはかろうとしたドラマだ。

日本民間放送連盟賞テレビドラマ部門グランプリは、H.T.B開局50周年ドラマ「チャンネルはそのまま!」(北海道テレビ)だった。全5話の連続ドラマで、テレビ局で働く若者のいきいきとした姿を描いている。北海道☆テレビの報道部に、バカ枠で採用された新人記者(芳根京子)が、型破りで非常識ともいえる体当たり取材でその個性を発揮する。そして、同期の優秀な記者(飯島寛騎)が彼女といひコンビになる。若者のテレビ離れが言われる昨今だが、テレビの仕事の魅力が伝わるドラマになっている。(原作は、漫画家の佐々木倫子が北海道テレビを取材して書いた同名漫画。脚本〓森ハヤシ、監督〓藤村忠寿ほか、総監督〓本広克行、プロデューサー〓嬉野雅道、多田健ほか、エグゼクティブプロデューサー〓福屋彦)

ローカル局で特別番組として制作されたテレビドラマを、他の地域で視聴する機会に限られている。そういった意味で、ここであげたTBCやH.T.Vの受賞がSNS等で発信されれば、その存在が広く全国に知られ放送を望む声へとつながっていく。

人気シリーズものについて追記すれば、テレビ朝日の医療ドラマ、捜査ものが上位をし

めた。木曜ドラマ「ドクターX〜外科医・大門未知子〜」(脚本〓中園ミホ、林誠人ほか、エグゼクティブプロデューサー〓内山聖子)は、2012年に放送を開始して以来、season 10(テレビ朝日開局60周年記念、10月〜)となり、連続ドラマ世帯視聴率のトップとなった。

また、「相棒」の人氣も安定している。2000年に単発ドラマとして放送されて以来、20年目に突入している。「相棒 season 17」(2018年10月〜2019年3月)、「season 18」(19年10月〜、テレビ朝日開局60周年記念、主演〓水谷豊、反町隆史、脚本〓奥水泰弘ほか、監督〓橋本一ほか)。

1999年にシリーズを開始した木曜ミステリー「科捜研の女」(主演〓沢口靖子、脚本〓櫻井武晴、戸田山雅司ほか、監督〓森本浩史、田崎竜太)も、「season 19」(2019年4月〜、テレビ朝日開局60周年記念)に突入している。

2019年の高世帯視聴率番組の1位、2位はラグビーの試合中継が占めた。また、一方では自然災害(台風)関連のニュースが「2019年高世帯視聴率30」(ビデオリサーチ調べ/関東地区)のうち14件となった。

しかし30位以内のドラマは、NHKの連続テレビ小説「なつぞら」(主演〓広瀬すず、脚本〓大森寿美男、演出〓木村隆文、田中正

か)のみで、30位だった。「なつぞら」は連続テレビ小説の100作目である。一方、大河ドラマは2020年の東京オリンピックを目前に、1964年に東京で開催されたオリンピックを題材にした「いだてん〜東京オリムピック噺」を放送したが、視聴率的にはふるわなかった。